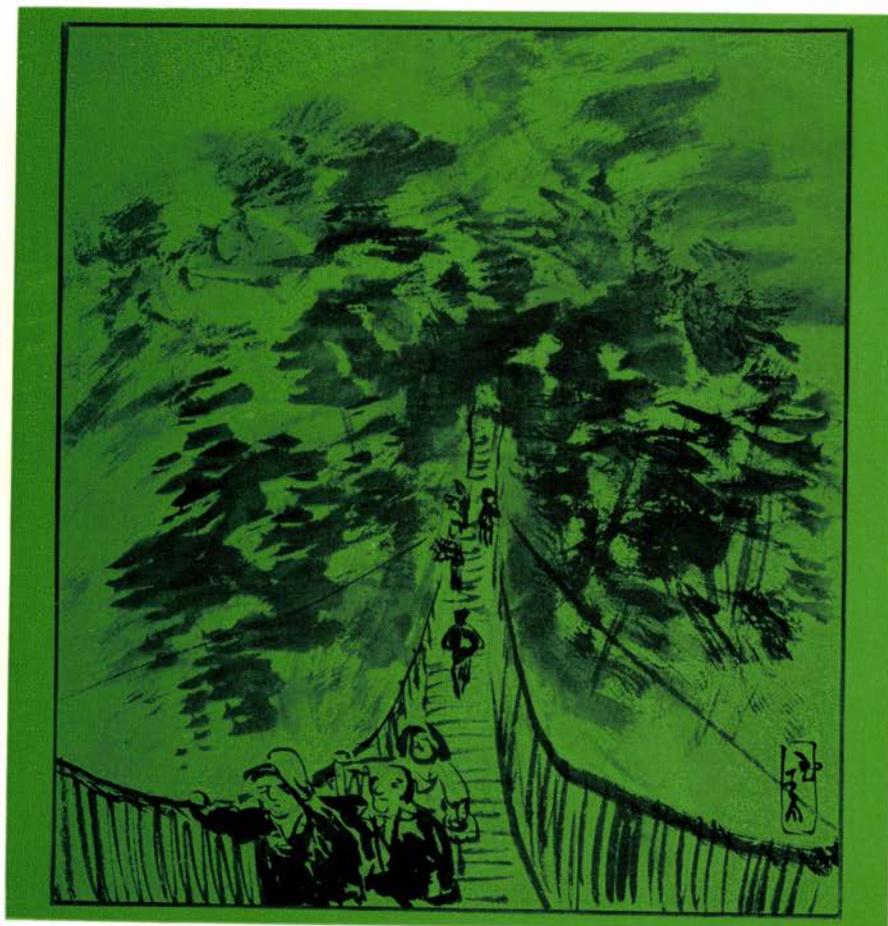


# 川柳塔

昭和五十一年一月二十九日  
昭和五十一年八月二十五日  
創刊大正十三年通卷五九一號  
第三種郵便物認可  
印刷每月一日發行



日川協加盟

No. 591

八月号

姉妹品大和錦印



警察庁・警視庁  
全国府県警察  
大阪府警察本部  
講道館・御指定

# 柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社  
大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1  
電話(779)1690~2番

暑中お見舞い申しあげます

季節料理・折詰

# 大 萬

大阪市阿倍野区松崎町  
TEL (623) 5031・5032  
南区豊屋町三ツ寺センター  
TEL (211) 9184

## 再びゼニのこと

山城兄愛妻を喪う

耐えに耐えやがて静かな紅椿

開田華羽兄長逝

つゆ空にうしろ姿がふりむかず

十萬億土句帳離さぬ一人旅

筆まめな君からとどかぬ旅日より

思い出はディズニールランドに車椅子

先月この欄で「ゼニ」の事を書いた。「ゼニ」は「おたから」と昔からきまつている。最近郎永漢氏が「お金も頼りにならない」と題した本を出版された。勿論「ゼニ」の評価は時代により又はケースバイケースで千差万別である。先月孫達を伊丹空港まで見送りに行った。一寸所用があつて新大阪駅に回り、タクシードで伊丹に出た。千八百円の料金。帰途は新大阪駅ゆきのバスを見つけ、涼しい窓側の席で直行。所要時間は殆ど同じの25分間。料金は一七〇円也。ここで老川柳人が考

えた事は、両者の差一、六三〇円のゼニの価値である。先ず新大阪駅の食堂街で鉄火巻とビール、合計八五〇円、週刊誌一五〇円、まだ六三〇円残る。難波の高島屋で信州そば手打ち実演を見て三束求め、二七〇円。南海電車の一五〇円払つても二一〇円残る。先刻飲んだビールが程よく回つて来てご機嫌よくご帰還。夕食に一東九〇円のそばを半分ゆでたら老妻と二人では食べきれず笑い出して終った。お金持ちになるためには凡そ三十年手遅れだった。

中島生々庵

川柳塔八月号



座右の句

満でよし数えでもよし日々新

(好郎)

私の句

山彦になって我が子がついて来る

垂井千寿子

# 川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

再びゼニのこと……………中島生々庵……………(1)

初心……………戸田古方……………(2)

誹風柳多留廿五篇研究……………(十二)……………(24)

清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮  
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫

川柳塔(同人作品)……………若本多久志選……………(4)

水煙抄……………川村好郎選……………(30)

麻生路郎物語……………(20)……………(30)

秀句鑑賞……………(同人吟)……………(21)

…(水煙抄)……………浜田久米雄……………(42)

近作……………諸家……………(43)

百人一首と川柳……………(26)……………(29)

愛染帖……………富士野鞍馬……………(38)

岡田甫氏と私……………正本水客選……………(40)

石崎柳石……………(26)

## 初心

戸田古方

もう一、二年で柳歴四十年になろうとしている私ですが、生命ある句どころか、やっと全没を免れ、淋しい思いで句会場を去る場合も屢々です。

抜けることが能じやないといいた口を叩いたり、柳話、講座指導の委嘱、原稿依頼に偉くなったように一人で自惚れたり、偶に、気に入った句が選に入ると、数より質だと自慰したりしますが、俺の屍を乗越えて呉れた後輩の佳句を反趨して自慢するのが落ちです。

近頃、頻りに初心という事を思うようになってきました。それは普天句稿の整理を始めてからでした。松坂クラブで、入門の日から親しくして頂いていた戸倉普天さん。十年前に亡くなられ、令息仁一郎氏から五千に余る句を持ち込まれました。普天さんは一生を織維業界に献げ、日東紡の重役として功成り、名遂げ、晩年は故山、兵庫県柏原の旧家丹波屋の主人として晴耕雨読を楽しまれた偉大な平凡人でした。

採算はどうあろうとも麦を踏む 普天  
句業は大正三年に始り、稿の終っている昭和三十年代半まで、一句として野心らしいも

岡田三面子と泉鏡花

女シリーズ

一分間の柳論

人間陶冶の熟成

雅号ぶっちゃげばなし

山田季賢君近く

初歩教室

大萬川柳「指」

柳界展望

各地柳壇(佳句地10選)

一路集・「中元」

「寝不足」

一路集「金婚」

「高官」

編集後記

吉田 水車 (27)

菊沢小松園 (27)

岩本雀踊子 (70)

戸田 古方 (28)

河原みのる (71)

正本 水客 (44)

本田恵二朗 (48)

川村好郎選 (50)

(庸佑・整理) (52)

谷垣史好選 (63)

清水一保選 (69)

出原敬一選 (45)

落合思月選 (46)

新岡回天子選 (46)

(二三夫・葉子) (73)

座右の句

スパッと斬られたしおおらかに生きたし

私の句

勲章を飾れる胸が僕にない

玉置 重人

(太茂津)

のは見当りません。これまた、偉大な平凡な柳人でした。

入門早々、詠史川柳に走ったり、最近では師路郎先生から賜った人間陶冶を自己流に解釈して、他に押しつけようと、腕き廻っている色気が多い私、眼の両脇に自ら高い壁を造ってしまっているのに違いありません。剛慢、不遜、増長の限りです。

小児科は母が診察うけるよう 孤 蓬

振袖は泣くも笑うも袖です 孤 蓬

喜怒哀楽さて迷惑なお月さま 孤 蓬

昭和十三年、松坂クラブで、師に始めて拾われた句です。お釈迦さまの掌上から一歩も出られなかった孫悟空とは私の事でした。

人間陶冶はいい格好ではない。生命ある句は己を捨て切った処にこそとも思われてまいります。新興川柳の解らないのを嘆く前に、もう一度、古川柳の一句一句を味うことの大切さ、先輩、達人の佳句吟味の大切さ。

選後に掃き捨て去られる没句を頂いて来て一句一句の見直し。捨てても、捨てても切れない魂の底に蹲る物、この牡蠣殻のようにこびりついている物の向うにこそ、意識の外の彼岸にこそ、生命ある句が腹郁と光り輝いているのではないのでしょうか。まだ、そんなことをいうている。大喝一番、生命ある句を全く忘れ去る日にこそ、生命ある句があるのかも知れません。



若本多久志選

大阪市 中川 滋雀

身を責める旅の輪袈裟が重くなる  
かりそめの世に食うだけの泣き笑い

喜びを生活の死角に置き忘れ

金の成る木にも突らぬ土があり

人形になるため息をしまい込み

花道を飾る台詞で左遷され

八尾市 高橋 夕花

子を叱る言葉もけむる梅雨の中

何一つ飾るものなき足跡よ

慈雨のごと胸にしみ入る般若経

うたかたの愛を化石にしたくなる

ニッコリ笑えば倅せそうに見え

祈らねばこの倅せが逃げてゆく

鳥取市 両川 洋々

多数決と言う暴力でケリをつけ

貧乏は言うまい産む気の産着縫う

あくび一つ守衛に無事な夜が明け

産む決心つけろと胎児腹をけり  
勉強になったと失敗無駄にせず  
拡がった噂へ寡婦の灯を細め

大阪市 江城 修史

父の日の私を飾る子の便り

雑草の意気地が欲しい日の疲れ

掌に残る居職の温くみ詩にならず

酔い痴れて心に明日のない男

小さな奢り旅する妻の饒舌よ

松原市 谷垣 史好

コップ酒なぜ往来に背を向ける

母の死に流す涙を溜めておく

父の日の父は場外馬券場

若者の租界でハンバーガーを食う

野も風もみどり本堂落慶す

島根県 堀江 正朗

倅せは月のまるさをまだ覚え

懸命に生きてる妻の炊いた膳

見えぬ目も閉じれば平和とりもどし  
部分品 痛みはじめて年を読む  
雑草に触れば幼き頃の友

大阪市 不二田 一三夫

秋田實先生に勲四等瑞宝章(二句)

前人未踏 笑いの台本五千本  
美少女の老いゆく姿おもうまい  
神を説き女も口説くすこやかさ  
常識人だから駆使する二枚舌  
眉目秀麗の悪党もありはあり

大阪市 小出 智子

ところでん大きなよろこびなどいらぬ  
雨の所為ばかりではない背なの冷え  
自画像の眉のあたりにある迷い  
六月の雨に心をあずけおく  
こめかみに四五日ひとを許せない

香川県 三井 酔夢

傷ついてカヤツリグサのなつかしさ  
ひとり旅またガラクタを買ひ漁り  
男毅然としてベストセラー読まず  
荆妻の病むよりましとゴルフ熱  
女丈夫のギックリ腰が小気味よい

鳥取県 清水 一保

早起きをして太陽を一人占め

人間にも酒にも階級作つとき  
出陣のように出勤見送られ  
信頼すべきは太陽だけとなる世相  
田植機が早乙女の唄まで奪い

青森市 工藤 甲吉

頭から濡れて甘露の法雨とす  
香煙るる悪人というものは無し  
凡庸はよし賞も無く罰も無く  
ほとぼしる喜び雀よくしゃべり  
間違えて寶石店がやって来た

東大阪市 竹中 肖二

老松が孤高を競う萩城趾  
松下村塾柱の傷をしかと見る  
日本海嶽と濤と待峙する  
謙虚さも過ぎれば卑屈な人に見え  
夫の愛信じて今宵妊りぬ

大阪市 金井 文秋

茜雲天地を染めて満ち足りる  
歳時記に逆らう花もある花屋  
年金を貰いあれこれ夢が増え  
身仕度は自分で済ませ釣りの朝  
劣等感他人の力買いかぶり

島根県 堀江 芳子

秒針の正直 心のまま響く  
独り寝の思案 天井に智恵もらい

子に折れる弱味に老いたなと想う  
大切に生きて一日まるく暮れ  
子と語るほのぼの満たす新茶かな

高槻市 福田 丁路

抵当にはいった家で見栄を張り  
太陽の恵みにトマト頬を染め  
鳶が舞う長閑な村の鬼瓦  
神域を汚す不逞のラブシーン  
苔蒸して読めぬ句碑あり時雨する

岡山市 嘉数 千代香

門灯に母のころを詰めて待ち  
今日を積む積木は今日のうちに積む  
静かなる闘志 おんなが釘を刺す  
愛の雫にきのうの罪を洗われる  
悔いのない足音でした母は逝く

八尾市 大 路 美 幸

政治家のみそぎは黒い靴のまま  
たぎる血が政治の嘘を許さない  
簡単なことだよゴミはゴミ箱へ  
一円足りぬと銀行から電話  
峠茶屋一期一会の餅を買う

今治市 越 智 一 水

母の日の母は素顔でうれしがり  
息抜きの場所に本屋を一つ入れ  
少年が風と光へたわむれる

車窓から登った山をなつかしみ  
麥笛を吹いて幼い恋は秘め

島根県 大森 孝華

鯛やき君せめてプライド捨てないで  
鈍行でゆくほかはなし彩を選ぶ  
諸々の雑念ごま木と共に燃え  
漫談へ心預けて息を抜き  
ネックレス胸の晴れ着へ通り雨

八尾市 宮 西 弥 生

縁結び願えば自由の残り福  
しのび逢う部屋はノックのない世界  
札束で買えない自由の地図を描く  
白旗をととき振って雌雄の和  
よう稼ぐ腕に電化の部屋狭し

兵庫県 遠 山 可 住

梵鐘の余韻が里へとどかない  
心なと若くありたい球を追う  
鍛握る汗がそのまま農夫の詩  
栗接いでいのちは小さい芽に継がれ  
二の腕の白さで夏を老いて行く

倉吉市 奥 谷 弘 朗

今日も無事妻に手渡す弁当箱  
絵に描いた餅に賛成しいられる  
大切な何かが風化した日本  
倅より若い課長が来て座り

丸い目で見るとまろい人に見え

倉敷市

野田 素身郎

役付になり無言で耐えることを知る

すり切れた背広一家を支えてる

理屈は子供のいうとおりだが叱つとき

長男も長女もテスト夜のしじま

二次会に来てまで駆け引きが続く

八尾市

香川 酔々

ジャンケンポン善人いつも負けている

ポンコツとなって悪人写経する

予報雨ゆっくり顔を無てる雨

東塔と西塔の私語風薫る

先頭の男の喇叭狂い出す

西宮市

島居 百酒

子の三浪破れかぶれか愚痴を捨て

武者人形俺より古い節句をし

職のない人と比べて自慰とする

俺もまた花で死にたい桜寺

追憶のつまりは憐さだけ残り

宝塚市

傍島 静馬

分を知る柳は風にさからわず

白髪染思案にあまる白眉毛

立膝もストラックスでは絵にならず

コーヒーぐらいならから女墜ちていく

たい焼き屋歌がすたれてから落目

将来への起点過去を切り捨てる

孤独の影へ損得だけ写り

だましに来たのでだまされてやり

現代を呼吸し独り相撲取っている

うれしい事重なつて心乱れがち

藤井寺市

西 いわを

青梅の實のふくらみは頬の肉

性格の一部も話す花作り

屑籠に捨てられしより燃ゆるのみ

門柱へことわりもなく蝸牛

アカシヤの甘い香りは詩を呼ぶ

松江市

吉岡 通児

人間味語るに落ちる方が好き

白髪染め共用夫婦五十路行く

上下線ともストップ ザ震度四

自説固辞おとこある時非と知るも

後継ぎのないまま居職捨てきれず

和歌山市

野村 太茂津

自他共に許す綱に錆一ツ

身から出た小さい錆を拭くゆとり

病巣を掴み抛りたい夜の焦り

フテ寝して見せて病魔へ立ち向う

漢方を医者若さへ説くゆとり

大阪市

本多 柳志

大阪市 天正 千梢

囑託の辞令わびしい利用価値  
五つ児のカルテ地球を駆けめぐる

握らせて謎をかけてる瞳が笑い  
妥結してまだ戦は終らない  
旅たのし妻は物価をくらべ合い

神戸市 小浜 牧人

てのひらの上のドラマに幕がない

老いの旅路一期一会を大切に

水やって明日を信じる柿の種

水かけ地藏へ女はかない夢を持つ

父の日の父に自嘲が少しある

松原市 玉置 重人

下戸一度酔うて言いたいことがあり

実力者ある日ペットに語りかけ

花道を歩けば瀏が待っていた

掌中の珠に乳房の豊なる

勝負するプロポーションにある自信

鳥根県 錦 織 文子

人間 国宝となつてからすきとおり

お茶を揉む自適の日々へも疲れ

よちよちの靴 地球を歩き出す

庭石と語るゆとりをやつと持ち

さりげなくかわして友の域越えず

鳥取県 鈴 木 村 諷子

長老に物の季節をきいてみる

こん日ただ今愉しかったらいいと言う

箸紙を伸して貼って旅日記

怒号して男の像の荒けずり

エンジンの交響 村は田植する

松江市 小林 孤呂二

酒瓶を目盛り自重の酒とせり

そろそろ選挙ですねと嫌な人

ライターの炎へ次の策を練る

味噌汁のあじ辛くして盛夏なり

遅刻して自動ドアへ面はゆし

鳥根県 藤 井 明 朗

旅に出て心に残る城下町

素顔のおんな温泉の街で逢う

人間を忘れけものになつてくる

佐渡の旅

金山の哀史も今は観光地

佐渡情緒満喫してひとり寝る

竹原市 時 広 一 路

台本を外れて言葉見失ない

涼しさが着れる女の羨まし

賭けるのが怖い男に細い道

朝一杯吸うて顔でも洗おうか

せんべいのポリポリ音のする美味さ

桜井市 岩 本 雀 踊子

停年のかげりへちびてた朝の靴

もう一度女の愚かさ賭けて見る  
行儀悪くなつた我が家の風も夏  
僕ひとりだけの話しさめしにする  
燃えあがる残り火もつていた夫婦

守口市 羽原 静歩

ネクタイの幅ゆっくりと若返る  
睡蓮のなよなよ絆は断ち切れぬ  
在天の霊も悲しむロッキード  
お茶漬けという名の倅せをかみしめる  
フルコース体裁ずくめの顔ばかり

富田林市 板尾 岳人

風すこしころろにつめて峠歩く  
一組の夫婦が歩く山の峰  
山男遺書なら書ける山の峰  
山の峰だんだん母の背に似たり  
天井の高さを知らぬ山の峰

竹原市 三宅 不朽

嘘ひとつ繕う噂へ腕を組み  
それぞれの素顔花火と星空と  
生き難き死に難き貌檻の鶴  
過去は過去踏絵を抱いて旅に出る

東京都 山根 白星

いちじくの葉っぱはイヴの示唆に依る  
四捨五入四捨の悲鳴がきこえぬか  
補助席に座す月給の安い順

お流れを貰う役者が上である

尼崎市 黒川 紫香

抱き合うてベンチ二人のものにする  
桜鯛 旅しあわせなものとなり

北九州

足早に消える夕陽へ舟一つ (小浜温泉)  
丘政に踏まれ雑草だけ残り (原城)

鳥取市 河村 日満

ためらいもなくすらすらと老いの嘘  
十年の月日思想を逆か撫でる  
もうこんな質問をする孫を逃げ  
長男と長女両家も悩みぬき

倉敷市 田垣 方大

呼び捨てに心がかようクラス会  
天地悠久俺も鎖の輪にすぎず  
潮満ちてくるよう娘は反抗期  
ふと秋を感じる入道雲の奥

高槻市 若柳 潮花

押売りのブザーに馴れて座を立たず  
高層の窓に小さな鯉のぼり  
釜カ崎誰れもふるさと口にせず  
灯を消して聞く蘭蝶の糸が込む

名古屋市 吉田 水車

一人食う膳の目刺もかさこそと  
一と思案して水車まわりけり

まちまちの笛で工場街の昼  
本願寺堂の広さよ涼しさよ

大阪市 吉田 圭井堂

毒説も悪意がなくて楽しませ  
あきもせずあきられもせず五十年  
古色蒼然貫い手のないモーニング  
書いて消し直して遺言まだ出来ず

西宮市 若林 草 右

ボーダーラインまあ少々はと医者はずれ  
汚ごされた雨の葉書はクイズめき

長男山科へ転居

隣組由良さんも居る転居先  
引越しへゴキブリぞろぞろついで行き

松江市 中川 晃 男

両親の五十年記念霊祭

亡父母の齢より生きて墓洗う  
水かけてかけて墓石に何祈る  
墓地の隅々に光る五月の陽  
亡き父母に叱って貰う夜の甘え

八尾市 高杉 鬼 遊

兵糧にこと欠く人の夏休み  
ヒロシマにまた原爆の夢がさめ  
父の螢母の螢の灯を追えり  
紫陽花は正直者よ男去る

豊中市 戸田 古 方

小さな善意今日は素直に有難し  
妻入りのまだ続いている城下町  
待たされることも楽しい花の駅  
邪念があるので掛け合い負けました

東大阪市 市場 没食子

まだ生きていたい証拠に煙草止め  
景氣上昇肌を感じるまで行かず  
金でヒビ入る友情だったか寂し

七月九日

無位無勲我七十五の誕生日

岸和田市 高橋 操 子

絆着る幼き頃と同じ柄  
書き留める事も忘れたもの忘れ  
十人十腹なぐさめる術もなし  
割り切れぬ世に老いひそと花いじる

大阪市 西出 一 栄

銘つきの華麗なサツキ誇らしげ  
あじさいの色を競うて誰を待つ  
菖蒲園一期一会の人も友  
他所行きの髪へ枕のあてどころ

大阪市 河野 君 子

うどんつるつる真昼の顔を浮かせてる  
星月夜日々の多忙は云わずおく  
陽が照ってあじさい浮気な彩を見せ  
メモ帳の秘密と夢を持ち歩く

美祿市 安平次 弘道  
美しい嘘をルージュは知っている

商魂に菊は季節をだまされる  
遭難碑山の恐さを語りかけ  
太陽に悔いる日があり原爆忌

氷見市 関 美子

ひじき煮る金で買えない味を煮る  
母と言う名のもと自分を見失ない  
初対面あまりにも似た運命河  
惚れぐあい女ソロバンはじいてる

岡山県 直原 七面山

泣けば泣いてるつけぼくろ  
怒鳴り散らして父孤独  
狙い狙われスリとデカ  
留守を位牌に頼んで出

高槻市 山田 季 賛

遺句(2)

妻の雲行き悪いので僕は無口になり  
うたた寝の妻の寝顔がいじらしい  
病室の窓夕焼ける明日を信じ  
七転八起今日の命の無事祈る

貝塚市 行 天 千 代

噛み合わせぬ歯車冷たい夜が更ける  
へそくりも土産に化けて旅終る  
市場籠かかえて友と久し振り

着物から服に着替える二十五度

生駒市 草 深 醉 升

旅に出る朝も洗濯してる妻  
末法の政治がさせた土地成金  
いじらしや黄色い列へそそぐ雨  
名を忘れたままできよならしてしま

和歌山市 沢 山 福 水

花道を去る勇退の佳き姿  
湯の町のムードに老いの血も騒ぎ  
ひやかした易が老後の的を射る  
白秋の詩心にふれて子を愛す

倉敷市 稲 田 豊 作

かいつまんで申せば金の要る話  
半端者夫婦で一つの灯を守る  
言いたいこと咽喉につかえて姑の咳  
恩寵の雫 受皿いそがねば

大阪市 室 谷 徹 舟

司会者の蝶タイ 如才ないマイク  
倅せは心で掴むこと悟り  
料理みて今夜は酒にすると云う  
石仏動くことなし初夏の風

神戸市 仲 どんたく

屍に鞭打つ音も遺作展  
送別会涙を隠す歌とする  
赤坂で政界浄化の策を練り

仕合わせは愚妻豚兒の酌で飲み

東大阪市 齋藤 三十四

出張が我が家の膳を恋しがり

梅干の効用母はゆずらない

ビルの谷間クラゲのように傘が行く

京の街蛇の目が似合う雨が降る

大和郡山市 森田 カズエ

たらこみな育った夢をみた恐怖

かくれ寺訪う道端の磨崖佛

宝くじ誰れかに当るからならび

カーテンの色から吾が家夏の色

藤井寺市 児島 与呂志

邪魔くさい噂が露地をねり歩き

馬鹿らしい嘘が酔う程よく続き

人柄の好き信じ合い嘘が無い

年輪が騙まし騙まされいい夫婦

呉市 榎田 英詩

世帯持つ男の旅は柳をはめ

孤独とは何とセンチな言い訳か

大志抱く蛙大地に出て干ばし

子の巣立ち母の乳房も干からびて

鳥取市 大塚 豊生

ペンだこへいつか抜がる夢を秘め

太陽へ一喜一憂振るう

そろそろと家長を譲る父となり

鮎焼いて遠い記憶にある故郷

笠岡市 松本 忠三

会社での主人はどんな顔かしら

お噂は奥様からと初対面

月例の句会田植えで延期され

商売は抜きにと商売上の口

倉敷市 水粉 千翁

低辺の匂い人間臭うなり

安らぎの吐息は夫婦だけのもの

ぎこちないくらし精一杯背伸び

ほのぼのと抱いて慕情に耐えている

出雲市 原 独仙

読経へ二階はギターの子供部屋

広いようで狭し異国で国訛り

生きるのへ疲れたなあと思う日も

鮎と河豚に似たり母娘の夏姿

諫早市 原田 明春

女だけ本気で燃えている涙

落ついた余生へ女房は古く見え

玄関をお茶の婦りが足で開け

正論をはいて出世に遠くいる

和泉市 西岡 洛醉

五十路越えわたしも女紅をひく

蠅一匹大の男のあわてよう

ねじ釘が不慣れの腕につむじ曲げ

熱い茶に変えて妥協の腹づもり

東大阪市 落合 思月

笑つても泣いても二人限りになり

正確な時計のように父帰宅

心得えて居ますと老妻目で笑い

仙人掌が咲いて不吉なこと想い

倉敷市 藤井 春日

湯上りの素足青畳の踏み心地

子等皆 父の背見つめて育ちゆく

紆余曲折タクトの欲しい人生譜

汚れきった身体を預ける人もなく

和歌山市 内芝 としよ

快方に向つた妻の薄化粧

荒海へ舵とる妻が居る安堵

はりつめて風船戻れぬ空の旅

一と言も愚痴らぬ母の淋しげに

松江市 岡崎 祥月

ちまき巻く妻鼻唄のリズミカル

一と雨に自然のみどり美しい

神様を頼れば花が咲いて来た

父の日の父かくしゃくとベタル踏む

和歌山市 若宮 武雄

握つてた石の温みを捨てかねて

生きてゆく道へ悟りの駄馬の汗

太陽へせめて汗して応えよう

白昼夢かも思い通りになつてゐる

今治市 原田 一風

茶飲み友達まだ生臭さ抜けて居ず

本来の素顔に還る妊婦服

当分は要る旧姓の認印

春夏秋冬梅雨は日本の生理日か

京都市 都倉 求芽

汗のない額が冷酷なこと考える

お客様が上げ底の方を買うてくれ

夢に愚痴愛に妬心とベンチ暮れ

山椒煮く匂い広がる梅雨晴れ間

守口市 野呂 右近

粗食こそ美食と麦を食わず妻

使わずに済ませましょうと買う消火器

一冊の本七十の胸おどる

女留守浅蜷が歌う台所

大田市 藤田 軒太楼

民宿に親しみ籠もる国訛り

山門を叩いて人間甦み返る

夕映の天守が見守る城下町

坐女の舞う鈴音に神話活きている

岡山県 出原 敬一

あすは咲く花を祈りのなかにおく

さしのべる支えにトマト微笑めり

ポーフラを遊ばせ水は生きてゐる

逝った子に覚めて振り子の音を聞く

大阪市 川口弘生

鯛島のお目目が可愛い古座の浜

六月二日十止庵雲の峰へ抜け

二年越しのコーヒー キューピッドが笑う

正座する猫に飼われてる気配なし

倉敷市 小幡里風

組板も乾き切ってる愛の距離

いち早く馳けつけ思案をくれた友

苦悩する僕に無限の空がある

水銀灯夜霧に濡れている慕情

島根県 小砂白汀

琴線に触れた余韻が鳴りやまず

白足袋の女の業をかくす色

函に金を着せると国も手が出せず

景気いいところ狙って天下り

大阪市 神夏磯道子

子宝の一人一人にある願い

その時は精一っぱいだった過去

絆もう切れず大波越えている

食卓の一輪季節の味をそえ

島根県 榎原秀子

葉桜と風の対話が聞える日

雨をさく湯ぶね想いはさまざまに

真青な芝生画になる女が佇ち

編上靴昔の傷を抱いてねる

八尾市 内海幸生

交際の広い男の垣をみる

家庭菜園食うにしのびぬ茄子一つ

母の手を渡げると母が近くなる

ふっきれぬ迷いを白い旅へ賭け

大阪市 河井庸佑

己れの分知って無理はせぬと決め

大学の講義にほしい処世術

機械ならとつくにつぶれる程使い

子に夢を託して子供しごいてる

大阪市 山川阿茶

塗りの下駄はかせてみたい素足なり

午睡から充分さめぬ聴診器

阿呆かいなと自分へ言う日が多すぎる

束脩を知ってる方が馬鹿にされ

東大阪市 本多清人

安全の手本のようなバスに乗り

夕暮れの橋筋誰れかと逢えそうな

通勤の足軽い日と重たい日

バス揺れて揺れて故郷もう間近

枚方市 宮川珠笑

多過ぎる釣銭震える手で返えす

これからは酒が云わせる本音です

雨もりは修理できない建築士

胃も腸も水に漬けたし二日酔

新宮市 大矢十郎

辞表出せばたいやき君に似る私

真実を量るはかりが壊れてる

金で済まぬ金で済まぬが金で済み

よくよくの腹立ち小さい声確か

竹原市 山内静水

人前で見せぬ貴男の甘えん坊

音たてて食べるのと叱る娘も十九

最後の最後は土下座の肚も決め

まっすぐに歩けばとんせんぼうをされ

松山市 谷のぶお

行く春の今日もいちにち誰も来ず

霧霽れてやっぱり島も海もある

帰りたくない別れたくなく雨を見る

デッキチュア少年の脛海の碧

兵庫県 河原みのる

クラクシヨンさよならアリガト気イつけろ

千万の衣裳と知らず鯉は着る

録音の郭公 のべつに啼かせすぎ

キンポウゲこがねは毒よと咲いてみせ

鳥取県 林露杖

アマリス熟れた肉感ただよわす

執着はない筈の金 さて金が要る

移り香が未練心を弄ぶ

体臭と魚臭と香水バス揺れる

岡山市 川端柳子

手鏡を伏せれば若い日の残像

ある日ある時エンピツ一本の気ままさ

決心の堅さ笑わない人形

引越してこれもわが家のものかしら

平田市 久家代仕男

岩を噛むしぶきへ鮎をかける竿

かぶらの種子がはじけるように蜘蛛巣立ち

声張りあげマイク噛むるかと思ひ

当分はおたまじゃくしで居るつもり

泉大津市 村上春巳

ハンサムに育ち立派なリスの髭

汐干狩袋の重みに夕焼ける

割箸の香り日本の味を添え

十二神将に椅子を貸してやろうかな

羽曳野市 塩満敏

またたびを食べて男は猫になり

こっちの餌は甘いぞ鮎を釣り

歴戦の勇士に似たり堀の鯉

生ツバがお前やっぱりタバコのみ

岡山市 白岩文衛

三段目のギャが近ごろ入らない

たてまえを言うとき教師の顔になる

女紋 女としての意地に生き

色のない虹を抱いて黙ってる

京都市 山本規不風(紙風改め)

ロボットのオモチャがわしに似て来てる  
うつぶんを晴らす映画とならぬ夜

こんな筈ないと受話器の手が震う  
人は人仮病の幸福かみしめる

大阪市 黒田真砂

食い違う子の夢確と論しつつ

鎖引きずって女に旅の果てしなく  
海女もぐる夫がにぎる命綱

たかぶりの素足芝生を強く踏み

富田林市 和田維久子

伊豆西海岸行

富士つつむいたずら雲に酔わされる

富士の顔二十歳の声となる車窓

その涙正夢となる世の無常

うす煙松の友となる便り

京都市 松川杜的

前田青郵展を見る

じっくりと青郵を観て来た雨の午後

金魚鉢の金魚のように事務机

任せば都かこんな会社が辞められず

老後思うふと恐ろしい夜のしじま

和歌山市 垂井千寿子

石投げて波紋の外へ逃げている

初孫を抱けば伝わる血の温み  
後遺症の足を庇うて手の愛し  
化粧品の話に乗り出す母達者

堺市 高橋千万子

矢面に向う男の顔たしか

糸を縫うて母にうれしいことが出来  
歩が揃うすまない人を思いつつ

ある日ふと妻の知らない鍵渡す

竹原市 小島蘭幸

スランプの男いよいよ梅雨に入る

鬼になれそうもない鏡の中の俺

一日一善そんな勇氣もない私

人生薄暮ここ一発が出ないまま

竹原市 森井菁居

吉日をうっかり男飲みすこす

うつつ抜かしてもやっぱり結果論

この家の平和おむつが白く舞う

セールスノート喜怒哀楽を秘め埋まる

富田林市 岩田美代

梅雨の坂今日は働く髪でない

ポンポン船今日の弾みも乗せてみる

楽焼もへのへのもへの空虚な日

ふしくれた食指が動くを恥じている

伊丹市 樫谷漫柳

持て余し気味の自由に縛られる

見て欲しいパーマに夫無関心  
子に世話は掛けまい妻と酌み交し  
引越して来た荷に碁盤チラと見え

大阪市

柳原静香

聴えないから静いのそとにいる  
見えるもの見る幸せに花菖蒲  
雨だれを心で聴いている紫煙  
投書欄の善意まだ国を滅ぼさず

大阪市

宮尾 あいき

蝶々がからかいに来た老の部屋  
敬老カード素直な心で受けておく  
思い出に浮ぶ小舟に亡夫がいて  
苦勞が抜けるとボンコツになっていた

西宮市

藤村 女

手離してぼろぼろ泣けるも母の膝  
針持てば人に負けない母米寿  
風みどりフォークダンスに揺れる髪  
すだれ越し恋しい人のシルエット

神戸市

中村 ゆきを

メニユーにはない愛嬌でようはやり  
変人のパイプ口からはなれない  
替芯のように男がまたかわり  
美しい人の小舟はいつも揺れ

松江市

柳楽鶴丸

出雲美人の産地で生れた倅せ

もう一度無冠になってあばれたい  
生れた日から五つ子はタレントに  
胸の火を盗んだ女に愛がない

奈良市

宮口 笛生

禿げて来た白くもなつた五十です  
金の無い倅せ真直ぐ家へ着き  
云いにくいことずけずけと若さかも  
ええ雨でおかけ様でと田植えすむ

東大阪市

竹中 綾女

おおしじま  
青海島波が作った芸術品  
秋芳洞初め見た程驚けず

石女が人形抱いて来る市場  
お互に打算はずれてから不仲

岸和田市

葛城 伊三郎

味噌汁の味さわやかな今朝の妻  
釣自慢あたら鱗に墨を塗り  
正直に馬鹿つけられて楽に生き  
横柄に道を聞くから教えない

東広島市

高橋 鬼焼

風鈴が鳴ってる 窓を開けようか  
信念を曲げず少年舟をこぐ  
空焼けて親のない子に夢をくれ  
スト権を持たぬ農夫のかたい指

松江市

恒松 叮紅

飲める口三人よれば胃の話

新築を見せて集金人へお茶  
歴史あと残る故郷をもつ誇り  
道標が無惨な事故を知っている

宇部市 平田実男

いいところは似ないものねと妻も笑み  
見る人の心で変る花の色

万点のテストが居間を明るくし  
お世辞だと取ってくれないのに慌わて

大阪市 神谷凡九郎

いつか来る死 無縁で居られない  
或る時は自分を捨てたいしあわせも

十止庵逝去

また会える句会信じていた訃報  
入選句十止庵という投句 (於 東大阪川柳会)

大東市 土岐トク子

顔合わせ心満たしてくれる旧友  
心情をかつて素朴な味をほめ

まだのこる蛙声市中の耳によし  
出た杭を打つに老骨手をこまね

堺市 河内天笑

飲びの鼓動つたわる酒をつぎ  
ハンドルを持たねばならぬ祝い酒

空き部屋に電話のベルがはね返り

仙台市 川村映輝

ゆずりあいの席に中年動かない

停年になってマーシャんに腰をすえ  
口だけの親切落目に近寄らず

小松市 馬場魚山

人力が軽く見られるコンパイン  
ストの駅時計は休みなく動き  
豊満な肉体事件の鍵握り

大阪市 津守柳信

親切に答えられずにいるあせり  
闘病へ笑いかけてる団地の灯  
平凡を願えば平凡と云う暮らし

和歌山市 津田与史

明治と昭和どうにもならぬ平行線  
梅雨の雨わが焦心をまたあふり  
十五本抜いて歯医者は驚かず

▽津田与史氏の七月号分、作者にご迷惑をかけおわびいたします。  
信号赤 光陰止める赤がない

斗病へ五月の太陽明る過ぎ  
生きる権利小鳥も餌を要求す

柳友を見舞う喜ぶ顔見たく

大阪市 神田秀峰

良ろしくと云う言伝の当てならず  
女房に甘える目覚し鳴り続き

雨垂れの窪みに悟る独り言

愛媛県 渡辺暁童

和訳洋訳 カナの珍訳

敗けのお辞儀に偲ぶ人柄  
先手乱れて 後手後手の敗け

榎原市 岩井 本蔭棒

BANKから年に二回のご挨拶  
むずむずと鼻毛気になる今日は閑  
立ったついでに戸棚あけてみる

岡山県 竹内 翁 童

乗る人の個性で鳴らすクラクシヨ  
ン

日曜日部落の用事押しかける

長期不況家計簿ギシギシ音をたて

大阪市 本間 満津子

金婚の旅行をポックリさん詣で  
美味いもの食はず長生きせよと云う  
わけありそう夫が呉れたブレゼント

鳥取県 森田 布堂

三分の二は税金という煙草  
人質を楯に空港血ぬられる  
証言があり口実が行き詰まり

兵庫県 大江 秋月

爪を切り過ぎそろばんちと合わず  
駅長が若いと思う年になり  
亡父の墓たばこを二本つけてあげ

米子市 増田 竹馬

宍道湖を一望に朝の蜷汁  
みやげ屋がキブアンドテーク傘を貸し

公園のベンチなれそめ知っている

東大阪市 桑原 喜風

老夫婦愛の絆に苔も見え

商人の眼から消費は尊とばれ

八掛に見る新聞に信をおき

唐津市 新岡 回天子

じっと見れば鳩にも嫉妬毛を立てる

念仏をとなえ邪念を捨て受験

うまいこと言って注射が無事にすみ

大阪市 藤田 頂留子

プライドもたたき売りたい日の弱身

三十年まだ南の島にある落ち穂

鏡にはウソのつけない眼の小じわ

鳥取市 小林 由多香

むりやりに推した議長にまるめられ

同じ柄着て新婚らしい宿ゆかた

そろそろかんばんママも酔うている

大阪市 西川 誓二

浄土まで煙が届けと焚く門火

ストリートに葉が効かぬもどかしさ

加太、友ヶ島吟行

秀吟に友ヶ島まで拍手くれ

滋賀県 溝口 はやを

六十になり味噌汁の作り方  
バラ色の人生という年でなし

年金に乞食心を育てられ

島根県

太田亀甲

少年の大志小石を投げてみる  
急病は餅がつまった事と聞く  
水清き神話の里の温泉に浸り

本田恵二朗

鬼の面の裏で父ごころが疼く  
振り上げた男の拳が宙に浮き  
或る自信見つけた朝の胸を張る  
釣り堀で本日休診さんに会い  
空っぽの魚籠悪友に覗かれる

正本水客

藤の房 伝うしとどな雨の色  
川面はう霧を船唄押してくる  
舟下る堀割の雨脚は乱さず  
梢ふかく石段の苔走る雨

川村好郎

天が抜けたような雨を紫陽花うけつけず  
見守ってくれる人あり老いの身も  
梅雨明けの草木に負けじ身構える  
不倅せ者ですと勝手に決めている  
いざこざを覗けばこも銭の音  
思ひ出の日記あつまりり女焼く

西尾葉

書齋とも座敷牢とも梅雨の部屋  
逢うて来て口数少ない受返辞

城跡へ一人で上る草いきれ

縁談の意見健康健康で覺

あわてまいことかゴキブリの最後翔び

菊沢小松園

青雲の志故郷へ帰えれぬことになり

御本家も起死回生の策はなし

ミンクのオーバーが気の毒になってくる顔  
褒められそうな死顔を稽古する

若本多久志

老いの夢ドライブマップにくすぐられ

思いつくまま旅立ちの荷も軽く

顧みて時効になつて罪の数

争うて勝つてもつまらぬ歳を知り

人生の花道もチト長過ぎて

尼緑之助

虚々実々の虚政治座談会

政治屋の心臓 寒きものよぎる

朝のお茶 代弁してくれる時事放談

時事放談敢て黙殺するもあらん

五月雨の中なる保革剣の峰

浜田久米雄

禁煙の努力を自分だけで褒め

ぼくがする禁煙はぼくだけのもの

禁煙の男やめたを言い触らし

禁煙をして人体のありがたき

禁煙の朝を雲雀が鳴いてくれ



左から一路郎先生・中島生々庵・戸田古方・川出美根子・石井白面人・戸倉普天・奥村丹路諸氏。

# 麻生路郎物語

(20)

—信濃の旅と松坂倶楽部—

東野大八

路郎師と浅間温泉一泊  
—わざめては湯の香の窓へ師をさそひ

民郎

(川柳雑誌四六〇号・足跡・石曾根民郎)

この信濃への旅は、九月十七日に上京し、川上三太郎宅を根城に東京柳人の有力者たちと懇談、横浜にも立寄り川柳協会の足固めとプロ川柳家として起つ旨の態度を表明する宣言の挨拶も兼ねたものであった。それだけに心身ともに落つかぬ在京三日間だったようだ、

昭和十一年九月二十日 路郎師は松本を訪れた。雨であった。

雨の松本にて

—遠く来て信濃に山のない日なり 路郎  
—朝空に雨は無帽の師を迎へ 民郎

この句が生れた。私(石曾根民郎)―筆者(註)は、松本で川柳展を開き、路郎師にみて貰い、松本の川柳家と座談会を開くことにしていた。大勢集った。終始にこやかに川柳を語り、雑誌を語った。浅間温泉に案内した。ゆっくり信濃の秋をたのしんでおられたようだった。

松本に着かれると、早速に家へ寄って頂き二人連れで傘をさし、ほんの百米ばかりの本城を訪れました。雨に濡れながら感慨深かそうでした。城から当然見える山は雲に隠れてみえず、そこであの句ができたわけです。浅間温泉に一しよに一泊、ここで語りあって翌日松本に出て展覧会をみて貰いました。会場は鶴林堂書店三階ホールで、ここは私の町内にある本屋です。この展覧会には、路郎さんにもいろいろ出品して頂きました。石膏でできた句のレリーフみたいなものも出しました。

―だしぬけに鐘が鳴るのも旅の事 路郎  
の横顔はそのまま私がゆずって貰い、私の居間に飾ってあります。

昭和十一年九月二十日路郎は信州松本市を訪れ、石曾根民郎らと旧交を温めた。

この年八月に川柳職業人を宣言したばかりの路郎にとっては、はげしい毀誉褒貶の渦中に身をさらした直後だけに、この信州信濃の旅は、ここからの解放感にひたる憩いのひとときであったようだ。

— 師の汽車よひとしお秋を縫うてゆけ

民 郎

(石曾根民郎書簡)

路郎にとつて信濃は、こころのくつろぎをあたたく抱きとめてくれる唯一の旅情の天地であつたらしい。川雜奉還を断行した直後にも信濃を訪れている。夫の信濃への深い関心に誘われてか、葎乃夫人もながい間の憧れの地であつた。そして昭和三十四年九月、夫婦そろつて湯田中の中島紫痴郎の無心庵にゆつくりと滞在。やがてそこから松本へ出て、民郎とともに浅間温泉に遊んでいる。

民郎は「川柳雑誌」No. 460の麻生路郎追悼号の、足跡でつぎのように書いている。

「湯田中の中島紫痴郎さんの無心庵に長く滞在、こよなくも信州の風物に接しられたのであつた。その帰途、お二人で松本に立寄られた。早速、浅間温泉におつれし、よもやまの話を花が咲いた。そのとき川柳雑誌の後継ということをしみじみと語られた。重大なことで、とかく私の口巾つたいことを洩らすべきことがらではなかつたが、私の育んでくれた川柳雑誌の速い将来についていささか関心を寄せないわけは来になつた。

深刻な話のほかでは、信州路へ入つた一休みを木曾福島で落ちつき、そこの宿屋で講習のあつた木曾踊を早速、葎乃奥様は熟得されて一と目慢された信州の漬物のうまさなどを二人して口を合わされたことであつた。」

話を再び昭和十二年(路郎五十歳)の時点に還えそう。以下、山雨楼メモ抄録。

この年、四月十八日第四回全国川柳人交歓大会が名古屋市中開かれ、路郎は関西側を代表して挨拶を述べた。関東側は周魚。(大会の内容は未詳)

前年夏から重態をつづけた葎乃が、秋十月には床上げしたものの、いぜん半病人生活をつづけていたが、この年六月には市電に乗るだけの体力を回復した。

名古屋支部創立句会 支部長吉田水車。

川雜六月号に藤村亜鈍が「川柳壇無能論」を書く。青年詩人であり、新進川柳人である同君の欺らざる告白、相当な反響あり。

七月七日本社例会に安川久留美来阪、散会后、竹葉亭で歓談。翌日路郎と共に神戸、舞子などに遊ぶ。九月キング喫茶店廃業。

十月二十五日事務所開設 西区土佐堀筑前橋電停前、昭和ビル二〇一号室。

十一月松坂屋松坂倶楽部の趣味道場で、毎月二回路郎川柳講座を開くことになった。俳句は青木月斗。

この松坂倶楽部の講座は、その後の「川柳雑誌」をささえ、「川柳塔」を担う路郎門下の有力同人多数の加盟を迎える記念すべき催しとなつた。「川柳雑誌」No. 四六〇号麻生路郎追悼号の座談会の中につきのような記事が載っている。

戸田古方 私が松坂倶楽部へ初めて伺つたのは昭和十三年の夏です。春から中島生々庵

さんが一足先きにお弟子入りしておられて、私が引っぱられました。松坂屋の七階で……。川村好郎 松坂倶楽部があつて、その中に川柳講座があつてその指導が路郎先生であつた。その特徴は席題が出て作句しておる間に各々が作ってきた研究句を先生の前に提出する。そして一人一人先生の机の前に呼ばれ、そしてその句について実に厳しい批評ご指導があつた。(当時の一枚大切に保存されていたのを持参、一同に示す)

こうしていちいち朱筆で添作して下さる。生々庵氏が、今頃まだこんな句を作っているのかと叱られて、平身低頭していられた姿を今でも覚えております。併し、そうした教導によつてその当時の会員達に優秀な作家が生れた。戸倉普天、中島生々庵、武部香林、宮田不二、小川恒明、新川博也、戸田古方、米本貴志子の諸氏らで末席を汚して私です。

戸田古方 私も根よう参りましたが、先生はとても私共の及ばん程の根気のよさで私達を導いて下さつた。

川村好郎 月二回で会費が一円。

西尾 菜 その当時の普通の例会は三十銭だったのです。だから今いうたはる一円だったら良い作家も輩出するでしょう。

戸田古方 紺の毛せんを敷いてその上に銘々が硯を置き、短冊の紙に席題を書くのです。夏にはおしほりも出ました。

川村好郎 松坂倶楽部の会員で北野劇場の古川緑波一座の観劇句会をやつた。その時に得た句を次の句会の時に披露され、おおかた

の人の句が緑波の劇を見たものでないといわらんような句が多い。吟行ということは、句材を新しく求めに行くので、その劇の中から新しい境地を発見して作句せねばならんと教えられた事を私は今でも忘れない。

戸田古方 私が川柳を始めた頃はうれしまざれに、あつちこちの句会へ誘はれて顔を出したところが先生に見つかつて「まだ早いわしがうん」と云うまで行つたらいかん」と叱られました。併し二十何年経つた今日から考えるとそれは誠に正しいお導きであつたと思ひます。

西尾 栞 先生は句の上では一步もゆづらず妥協されなかつた。阪大川柳会の長崎柳秀博士は若い頃は

「金魚屋に舞妓袂を教えられ」やら

「心中へ明日のお発ちを聞きにくる」とか良い句を作られていましたが、老齢になられたためか、時には平凡な句も作られるようになりました。しかしご本人は熱心なあまり自分の句が抜けないとすぐご機嫌が悪い。

「何んこの句とはらはらしませんのか」

と路郎先生に訊ねられても、先生は一言の下でした。商売気のある人なら一句ぐらいはという気になるのですが、決して決して……

それが阪大川柳会と云うのは句集を出すにしても句会をするにしても、すべて柳秀先生と路郎先生とお二人で経済面からすべてお世話して頂いてたんですが、そんなことはお世話はれしません。いいものはいい、悪いものは悪いと少しも妥協されませんでしたね。」

松坂倶楽部の指導スタイルは、どこか江戸の点者様式に似ていると評した人もいたとある。有恒倶楽部の有恒川柳会も同じ十一月にスタートしているが、これも松坂同様の指導様式をとっていたらしい。プロ川柳家として世に立つ路郎の矜持がよく示されている。川柳雑誌No.313（昭和二十八年）所載の、眼の散歩に高鷲重鈍に誘われ、住吉の日本将棋連盟関西本部へでかけ、高段者の対局を観戦したあと、つぎのように書いています。

「ここで川柳のことうづる。川柳に於ても、玄人と素人では作句態度が違わなければならぬ。川柳で玄人だと云える人は幾人もいないかも知れないが、玄人のいないところにその道の発展向上を期待することは木によつて魚を求めよるよりもなおむつかしいことだと私は思っている。

川柳に長く携っているからと云つて必ずしも玄人だとは云えない。というのは隠居のザル甚に等しい川柳家が、そこらにいないとは言えないからである。といつたからといって私は決して玄人を尊しとし素人を卑しいとしてゐるのではない。玄人は玄人としての鍔骨彫身の修業をし、素人は素人としての立場に立つて道を楽しむ態度を明らかにすべきではないかといふのである。玄人顔をして一向勉強しないのと、素人が玄人顔をしてノサバルのとは共に鼻持ちならぬといふのである。将棋の一駒動かす毎に一考、また一考することは、川柳の作句においては推蔽また

推蔽に当る。ろくに推蔽もしないで名句のできる筈はない。」

川柳の玄人を自任する路郎の意欲を示す例につきの一文がある。川柳雑誌No.425（昭和37年）の、作句以前」と題する吉川雉子郎について語つたものだ。抄録しておこう。

「明治末葉のことである。

東京の柳屋に喜音家古蝶、平瀬萬雄、吉川雉子郎という巧い川柳家がいた。この雉子郎が後の大衆作家吉川英治であることは一般には知られていない。（中略）古蝶は古調に通じるし萬雄は写生を得意としたが、雉子郎は彼が若い頃になめた苦勞の結晶ともいへべき心理的な作品だった。（中略）私が吉川英治の作品を一つも読んでいないといえば嘘のようだが、彼の作品だけでなく終戦以後、イヤもつと以前から日本の小説は耽読しないことにしている。その理由は簡単だ。自分のことに忙しいからだ。それに小説の地の文や会話など読んでみると、そんなことなら川柳で一呼吸ですむのにと思ふとイライラしてきて読んでゐる気がしなくなるのだ。（中略）私としては作家に対してはその努力に対しては敬意は表しているのだが、私の場合、右に述べたような感情が動くのをどう庄さえるすべもないのだ。

彼の作品を読まなかつた弁明が、自分の心境を語る破目になつたが、彼が彼の道を行つたように、私は私の道をまっしぐらに行つてゐるので、彼の作品をのぞき見るひまがなかつたというのが判りがいいだろう。」

誹風柳多留廿五篇研究

—(十二丁)—



八木敬一

紀内恒久・鈴木黄・清博美  
 青木迷朗・室山三柳・八木敬一  
 西原亮・入江勇・岡田甫

194 髪をおしんでおいはぎに一首よみ

紀内—飯尾宗祇の逸話。宗祇、諸国行脚最中、箱根山中で追剣にあい、物品は元より払子を作るためとて、その白髪まで取られそうになったので、

我がために払子ばかりは許せかし

塵の浮世をすてはつるまで

と一首を詠んだ。賊はこれに感じ入り、奪ったものを返した上、麓まで送ったという。

雲長と宗祇和漢の髭おしみ

二六・4

青木—贊。岡田甫先生著『川柳東海道』八箱根旧道Vに、この逸話は掲載されている。宗祇は箱根湯本で病歿し、同地の早雲寺(北修五代の墓がある)に墓(供養塚)がある。岡田—この伝説の根拠、出典を『川柳東海道』

を書くとき探したが、ついに見つけかねた。

195 螢飛ぶ下に哀な扇なり

紀内—(句はい軍の螢扇の上を飛び(二一五・5)で、すでに西原氏が解説されているのでここでは簡単に記す。

源三位頼政最後の場、平等院扇の芝を宇治名物螢をとりあわせて詠んだ句。

かるわぎの切にあふぎの上へのり 一五・36

むだ骨を折て扇の芝となり 三五・10

入江—同。

螢さへまけて平等院へにげ

拾六・10

岡田—同。

196 さあ御らんないといざり玉を出

紀内—「和氏の壁」の故事。

荆山に於いて璞玉を得たという楚人卞和。

これを厲王に献じたが、玉人の石であるとの判定に、王の怒りをかい、左足をきられた。

その後武王に献じるもやはり名玉であることが判らず、今度は右足をきられた、三度目に文王に献ずると初めて認められたという。

句は両足切られた卞和、三度目にはいざりとなつて玉を献じたという、それだけの句。

玉にたものをいだいていざり泣キ

二三・37

室山—この句は、本物のいざりが大罌丸を見世物的にしているのをも、におわせていよる。「いざりのきんたま」(いつもすれているので、すりきれていること)の語もある。入江—同。有名な戸塚の大きん玉にも掛けてあるのだろう。いざりの乞食が一文貰って、

「さあ、御らんない」と前をひろげて拜観させた。

清一入江氏、考え過ぎであろう。

八木一入江氏の匂いはする。

岡田一東海道戸塚の大キン（金に非ず）の所有者はイザリではなかった。というわけで礎稿に賛。

197 夏のひきうすに王ほうだまされる

紀内一不明。

室山一二十四孝の一、王褒。母は大の雷嫌い。母が死んでからその墓前にぬかづいていと、俄かの初雷。驚いた王褒は裸になり墓石を覆い、「母上で安心あれ、王褒これにおります」と、いったという。

ひき曰は、ごろごろというので、雷のある夏には、その首で王褒が「だまされる」というのである。

雷イハ晴レ石碑へ孝の袖のあと

一〇〇・129

入江一賛。晉書、王褒伝に「母ノ性雷ヲ畏ル。母没シテ雷スル毎ニスナワチ墓ニ到リて曰ク、褒此ニ在リト」とある。

岡田一賛。

198 箱根から見れハ大きにくぼいとこ

紀内一これもはつきりしない。

青木一八解・鑑▽「川柳江戸名所図会」に詳釈あり、要約すると、尾州徳川氏六代宗春が戸山屋敷（現戸山ハイツ）の中に東海道五十三次を横して造園し、東の方の小山を箱根山に見立て、道中をする積りで散策したという。蜀山人の「外山屋敷一見の記」、久世舎善の「戸山御庭記」にも記され、この小山は現在でも箱根山という愛称で付近の人々に親しまれている。

駒下駄で越すハ御庭の箱根山

四五・26

室山一同。亀甲の笠をかぶって吉原の春日野太夫に通い、遂に落籍。そして「春日野ハ東海道を八文字」（三六・24）、さらに「ふじをいけどって御庭へ五十三」（三二・24）となる。「高尾近々考」には、宗春がこの里へ入ったのは、享保一四・五年だから、相方は揚巻ではないか、とする由。

岡田一どうもスッキリしない。「大きにくぼいとこ」を大久保の暗示とすれば、小田原城主は大久保侯。ほんとうの箱根山から小田原の方を顧みて……と取れることもない。箱根八里の半分、四里も登ったのだから。

暑中お見舞い

申しあげます

清 博 美  
八 木 敬 一  
紀 内 恒 久  
青 木 迷 朗  
西 原 亮  
鈴 木 黄  
室 山 三 柳  
入 江 勇  
岡 田 甫

# 岡田甫氏と

私

石崎柳石

岡田甫氏(千葉治氏)は、近世庶民文化研究

所を創設せられ、「近世庶民文化」誌の百号の祝賀会を開催せられた。ちらしに曰く、「『近世庶民文化』が昭和廿五年に創刊されてから今年(注、会)のしおりあって、祝賀会場への案内(図面の添付)で十六年、近く刊出される百号を以て完結するという。まことに感慨深いものがあります。(中略)

創刊当時、四十五才の壮年だった岡田先生も、この年の十月八日で、満六十一才を迎えられます。年来お仕事にも油がのり、益々、福徳円満、古川柳研究にかけ替えのない貴重な存在であることは、我々だけでなく、衆目のひとしく認めることであります。……ご研究の作品は数あれど、別して「俳風柳多留」より抄出などの「俳風末摘花詳解」が傑出していることは御承知。艶句に解説、誠に今ならば文博に相当するのお方と拝察。野生にご紹介あって、ピンチヒッターと拔擢せられて、「国文学」特集「川柳日本文学史」

の中「万葉集と古川柳」を記載執筆致しました。約半年の期日余裕があり、諸書を漁り求め、苦心惨憺して集句に努めました。が、後にして、短歌講座「特殊研究篇」第十巻・昭和十年版に、「川柳と和歌」と題しての中平悦磨氏の之が論説のあるを知り、参照にもせず、後の祭り、誠に残念でした。五頁ばかりの小生の論考、始めて稿料金二千円をもらいました。さっそく御酒一升捧げ持って、厳嶋神社へお礼参りに出かけました。因みに同誌は、昭和卅一年三種便発行でした。

それに就いて甫氏の書翰があります。通釈・語釈欄の一部を鑑賞欄に移したり、失礼ながら大ぶん変更、統一のためにお許し下さい。などとも書いて、石崎学兄とあり、発行は八月中旬か九月号ですとも添え書きされている。本誌は昭和四十一年九月廿日発行となっている。

小生、「柳多留」の篇数の記入位と思うに、学術的には丁数まで記入せよとの岡田氏のお説でした。阿達夜潮音博士などの著書に丁数などの記入なきを申して之が返事の書翰もありました。

暇ふ事が先づ第一と定家撰り (三七・一)などを始めに載せて、

家持の次へ並ぶが論語説 (一・24)の篇数が分らず苦勞しました。思えば初篇中の句、これの欠篇丁数は岡田氏をわづらしました。が、この解説に古来二説あって、岡田氏は「家持、ヤカモチ、大伴家持」とわざわざ、解説をつけられました。そうして、

私立高校を、広島県立広島高等学校とまで改称せられて、誠に恥ぢ入りました。と申すは、同誌に、奇しくも国文学者人国記「広島県」が記載されて、恩師の方々知己の方々のお経歴が誌るされてあったからです。

この二説については、近刊の「柳多留論講初篇」監修、吉田精一博士、編集共述、大村沙華畏契、富士野敷馬氏、山路閑古氏、比企蟬人氏、浜田桐舎氏、杉本柳汀氏、山沢英雄雅台、田中蘭氏達に拠るものがあり、惜しむらくは之が索引がないことです。

家持の次に並ぶが論語よみ (24才)

宝十二・義2ウ(くわはうり成りけり)沙華氏曰く「……本句を家持と仲磨を詠みこんだものとする穿った説(岡田博士、日本史(川柳狂句集)もあるが、前句を案じ、また渡唐の歌人仲磨を論語読みと断ずるには難点もあるから、この説はとらないと。

閑古氏曰く「……この場合三面子説を全部無視することも出来ない」と。

蟬人氏も亦云う、閑説後半贊と。

英雄雅契も亦云う。「礎稿は「渡唐の歌人仲磨を論語よみと断ずるには難点もある」としたが、百人中で海外に出た経験のあるのは仲磨一人であるから論語読みの名称を与えてもさしつかえはあるまい。普通には大屋の次席に長屋の孔糞先生が坐ることもあるが、家持の居る席となると、果して坐れるものかどうか、百人一首となると天智天皇から、中納言(黄門)家持、阿倍仲磨と並んでいるので「果報なりけり」

というのではなからうか。

西原柳雨翁は、かずかずの名著を残されたが、篇数の代りに「宝」「明」などと時期の名称略を記入していられる。これも亦便利かと愚考する次第。読者諸子いかに存ぜられるや。あらあらかしこ、としか云う。

因みに、近く三省堂より活字本の「俳風柳多留全集」の出版の由承り、鶴首して俟つたと然りとなむ申上候。



## 岡田三面子と

## 泉鏡花

吉田水車

鏡花研究家村松定孝著「ことばの錬金術師―泉鏡花」の中で鏡花がまだ入門早々の尾崎紅葉家の玄関番をしていた時分のこと書かれていっているうちに左の一節が見える。

「玄関番から拭き掃除、走り使いの間には師匠の運動のお相手もさせられた。この運動というのが、変っていて、薪割、撃剣、弓道はまだよいとして、雨日は畳仕合と称して硯友社同人の巖谷小波や岡田三面子をまじえて家の中でドタンパンと相撲をとる……」三面子のことについてはほんのこれだけで

かには出て来ない。三面子は人も知る古川柳の研究者で、万句合や柳樽全篇を蒐集され岡田文庫に保管されていることでも斯界で有名である、そして氏は法学博士で刑法の泰斗であられるのに文学畑の硯友社の同人になって居られる点に興味をひかれるのは私の詭策癖かも知れない。

鏡花の紅葉入門は明治二十四年十月から二十八年二月までのことであるが、三面子・岡田朝太郎氏、は当時の東京帝大法科を明治二十一年に卒業しているの上記の玄関番の頃は二十五才前後の筈である。氏の古川柳研究はいつの頃から始まったのかその判るものか手もとにないけれども、古川柳はその時代の

## 女シリーズ

その6

跳ねのけて女かなしや疼くもの  
後家通すつもり涙見せられる  
人妻の隙だらけなる温かさ  
飽いてきた夫婦で外へ向きたがり  
手を握るだけでもこうも血が通い  
ぬけがらと知らぬ男がしがみつ  
愛嬌が主ある人をあやまらせ  
許された時間はみ出す血が狂い  
血が通うことも手紙に書きのこし  
鳩尾のあたりへ女の目が落ちる

園松小沢菊

人情、文物、わけて徳川藩政の法制を研究する必要上か、または川柳そのものにも興味をもたれ古典蒐集に大へんな努力をされたものと推察申すのである。

世には専攻の学問とは全く別な分野で名をなされた士はもろん数多いけれども、上述の一文は我々川柳界に縁のつながり、三面子博士の若かりしときのことだけに何となく看過出来ないものがあるので一筆しるした次第である。

因に三面子博士は明治元年生まれ、昭和十一年十一月十三日逝去。鏡花は明治六年十一月生まれであるから三面子とは六つ年下であった。

# 人間陶冶の熟成

## 人間陶冶—その展開と実践(三)

### 戸田 古方

真実の厳しさ、恐ろしさに醒めて人は反省をし懺悔をします。懺悔とは何でしょうか。

私が思想らしいものに始めて出合ったのは大正リベラリズムのさ中でした。「自然と人生」「死の影に」「日本から日本へ」など、蘆花徳富健次郎氏のヒューマニズムに先ず触れ、「出家とその弟子」で倉田百三氏を、その中で、親鸞の名を、嘆異抄を、さらに一灯園の西田天香氏の名前も知りました。「懺悔の生活」という本も手にしましたが、まだ懺悔の本質は程遠いものでした。

リングなる途端にすてる標準語。

三十数年前、教師生活に入ったばかりの私は大阪弁に未練を残し「大阪弁のセンセイ」といわれながら、踏み切りがつかないままでした。最近、国語審議会で、本気で大阪弁を標準語に取り入れる話があるときいて意を強くしています。大阪弁に「ボヤク」と

いうのがあります。漫才師人生幸朗さんの、「ボヤキ漫才」は大阪人に親まれていきます。

「ボヤキ漫才」に扱われているのは社会の出来事です。それは他人のことで、自分のこととはあまり出てきません。だが、それは自分の心に反応しないからなので、ボヤキとは批判に達しないのです。つまり不満をぶちまけて、共感を得ているのです。

役人の子はにきにきをよく覚え。

古川柳の中で一番社会批判らしい句です。市井市民の自嘲や他嘲の句は沢山あります。

人生批判ですが、自嘲も他嘲、自分をじかに嘲けるのではなく、客観の様式がとられていきます。だから、この段階では反省とか懺悔とはいえないでしょう。

これも五十年前の大正末期の話ですが、小人数で九州一周をしたことがありました。その中でも、忘れえず、強く印象に残っているのが長崎浦上の天主堂を訪れたときのことです。浦上の終点で電車を捨て、丘をのぼっていきますと、原爆で失われた、今はなき赤レンガの天主堂が聳えています。夕べのアンジェラスの鐘が響いてきます。ミレーの晩鐘さながらの農夫の祈りにも出合いました。夕照は会堂のステインドグラスを通して、黄に赤に青に緑に、大きな円柱の根元が染め出されています。そこにおかれた古いコンテツとパイプ、奥の壁の凹みには紅灯の小さいのが

ひとつとより、ぼんやり立ちますマリアさま。この暗がりに注目されるのが懺悔と教えられました。やっとな懺悔台にたどりつきましたが、これは信者の吐く罪の告白を、無面で牧師が聞きとるための設備です。

「叩けば塵が出る」とはよくいわれることです。大阪の落語家林家小染さんは「サッサ」という掃除布のコマーシャルでいつもいう「わたしやホコリのない男」が耳に残ります。さて、ホコリは漢字で塵でしょうが、塵のホコリの外に誇もホコリです。人々は誇のホコリには喜んで跳びつきませんが塵のホコリにはそっぽを向きます。ところが、真実の厳しさ、恐ろしさに醒めんとする人々にとっては塵のホコリに注目することとはより大切になってくるのです。「自惚れとかカサ気の無い人間はない」ともいいます。カサ気とは梅毒性です。自惚れの誇りが大きな顔をしてのさばるので、塵のホコリはどっかに置き忘れられています。これが懺悔の対称です。いよいよ、塵のホコリと正面きつてぶつかっていかねばならないのです。

そこで、真実に徹することの厳しさですが、客観的には真実を求めながら、主観的には真実から逃げたがるのです。自然科学など世界は比較的すんなりと、受け入れられながら、こと主観、自分に関係の度合いが深くなくと目をおおい、そっぽを向きたがりです。

欲があるので迷い、迷うから苦しむのです。苦しむのがイヤなら迷わないこと、迷うのがイヤなら欲を棄てることだと宗教人はいます。雨は何故降るのか、潮の干満は何故おこるのか、これらは誰しも自然科学の説明だけで納得しています。朝寝坊をしながら、遅刻したら大変と無理をする。無理をするから苦しいんです。人は苦しむことだけを見て原因にはしらん顔をきめこんでいます。

抜苦与楽とは苦を取って、楽を与えるということですが、人々は鬼は外と苦をほり出して、福は内と福がその後釜へ跳び込んでくる、全く異質のように楽の降臨を待ち望んでいます。だが、抜苦与楽とはそんなものでは

ありません。原因を明かにすることです。主観的真相に撤することです。私の苦しむのは私自身の原因以外にはないと自覚するとき、苦の中にあるそのままで、苦を苦でないと思えるようになってくるのです。それが本当の幸福を手に入れたということになるのです。真実の追求とはこのことをいうのです。

仏教では、この世のことを娑婆(シヤバ)ということですが、これが分つてくると、我が身が極悪人であるということも背けてきます。そこで私が生きていることが、独りで生きていけるのではなく、大勢の人々に守られて生かされていると喜んでこられるのです。最近、ある席で、「天国の門は地獄の底に

開かれている」ということばを得ましたが、全くその通りだと思えます。こうなると本当に心から頭が下りますし、幸福の陰は必ずついてきます。恩を感じ、感謝がわきます。感謝のわくところ、報恩の心が生まれ、たとえ些少なことでも、せめては、せめてはせぜずにいられぬ行いが世の中を潤します。世の中は明るさを取り戻します。倫理道徳も招ねかずしてわれわれのもの、一隅を照すか、千里を照し一隅を守るか、どちらにしても、真の満足、真の幸福、真実との合一が可能になります。川柳の批判精神は之を求め、そこで真の人間陶冶が熟成するのです。

## 作

今治市 月原 宵明

たんぼぼが蒸発をする月の夜

北海の夢見るまなこ冷凍魚

宮仕え三寒四温へ順応す

大洲市 米澤 暁明

東尋坊遊覧船が景を変え

もやもやはどうにもならぬ換気扇

老い二人孫の写真が対話さす

岐阜市 市川 鱗魚

友情へ媚びる落ち目は瞳も濁り

故郷に亡母あり渡る虹が欲し  
きれいな事だけが男の道でない

東京都 池口 呑歩

勤め先にも臍繰りの隠し場所

臍繰りに妻もおとぼけうまくなり

臍繰りで結局家の物を買ひ

今治市 長野 文庫

模擬テスト少年に敵つくらせる

うちとけていてもライバルしこりあり

極楽へ善人音もたてず行く

## 近

# 水煙抄

## 川村好郎選

西宮市 杉浦 婦美子

薔薇散りぬ憎悪も悔も過ぎしこと

小商い慣れて多少は狡くなり

無言の朝 紅茶の骸ひきあげる

ときめきの血よ新緑をかけめぐる

挿木する明日への証ほしくなり

岸和田市 池田 露子

団地窓カーテンだけにある個性

友情の中にも置いた車間距離

生き甲斐は母なき孫の母代り

あしらいの花に主役の座をとられ

ぼつぼつと話すときには標準語

三重県 川上 富子

奇型魚の悲鳴を君は感じぬか

石ころの頃をダイヤ振り向かず

生活を採どる絵具溶いている

燃えるよな赤を着たのは雨のせい

言い聞かすまるい言葉を選っている

柏原市 小谷 葉子

家中に匂いを残し妻は旅

内ポケットに明日の意欲を溜めておく

一行の言葉に淡き末練かな

外れ弾の仕掛に踊らされている

涙して語る女の筋書か

八尾市 田中 紀美代

たくらみが葍の色に溶けている

爪を塗る女 計算出来ており

野の花の悴せ地藏さんの横に咲き

中傷が離れぬ仲にしてしまい

和歌山市 西山 幸

忘れ去る苦しきだけの形見なり

夕風へ捨てた誰もが知らぬ詩

心病む古い女の着道楽

石仏の笑顔が哀し旅の雨

羽曳野市 麻野 幽玄

雑草よ延びよ緑のない都市だ

一對二其の差に堪える事に馴れ  
詩に託す謎は解けないままでよし  
汚れてる靴が支えている一家

大阪市 芝原路春

夏の月傷心支うすべをなき  
バラが赤いので余計に歯が疼く  
夫婦喜劇銀婚式へ来て佳境  
月給を運んで靴がちびてくる

大和高田市 岸本豊平次

縁先の火花が思い出育ててる  
人よりは短所が少々多いだけ  
殿様がご賞味されたと言う土産  
育児法腹へグラムで詰め込まれ

熊本市 有働芳仙

金とコネあれば俺だってボクだって  
自殺する人を笑えぬ世に変わり  
装身具外して牝豹の目に変わり  
少年の斗志は暴走族に化け

東予市 小山悠泉

過疎楽しいつか左還の水に馴れ  
息抜きの旅民宿と言う温み  
ゴキブリのデート深夜の台所  
陰口が儲け話へ向きを変え

寝屋川市 香川亜成

空白を埋める夜学に満たされず  
寝るだけの鍵穴が待っている団地  
ゆうれいの足跡を追う検察庁

島根県 松本文子

手を合わす老女哀しみこぼさない  
美少女の散る花びらをみるように  
妬心じくじく燃える今宵の赤い月  
明日を待つ人の心にある打算

尼崎市 中谷利美

社の話するなよ酒がまずくなる  
白黒をつけて不仲となるもいや  
不足ない齡でも嫌い空の旅  
酔うほどに父の話が意見じみ

岡山市 時末一灯

音ひとつ愛の崩れの風がぬけ  
二日酔記憶のかけらが刺しにくる  
椅子をけるそんな若さの欲しい日も  
結論へ構える今朝の歯をみがき

松江市 梅本登美也

暴走族一人になると泪ぐみ  
この金で旅したかった医者通い  
ふだん着をもたぬ金魚の水を替え

富田林市 中村優

音痴でも欲しい母の子守唄  
残照のこの花道へ六方踏む

速球も萎え変化球へしほる知恵

和歌山市 樫村 ふみよ

あきカンもねころんでいる春の土手

きずだらけの歴史残した古机

冷戦へ二才ながらの気を使い

大阪市 山本 焔 斉

私の強い女房に押されて五十年

相合傘夢二の昔がなつかしい

強引に穴ばかり買ひ無一文

寝屋川市 江口 度

よくはやる店は増築などしない

新入社白い鳥が腑に落ちず

スポットを浴びると予言狂いだす

西宮市 井上 のぼる

旅帰り我が家はいいなメザシ焼く

夜光虫燃えぬ女の鬼火かも

螺子一つ抜けたムードに席を立つ

大阪市 那 須 鎮 彦

眼に青葉庭に尼僧とあじさいと

敵しさへ炎える夕陽のありがたく

信号へ父は模範の足となる

東大阪市 崎 山 美 子

スターにも皿洗いたした過去があり

豆腐にもいやな日があり針供養

主役より脇役でよい我が人生

倉敷市 藤原 健二

正論は青い意見で葬られ

鬼女の面架けて女の一人部屋

地下足袋に合ってる足で靴ずれし

亀岡市 森 和 堂

本当のことが言えない言葉遠り

本来空阿片どころじゃござりやせん

宗門は欲異抄忘れもめている

竹原市 大 島 花 炎

銀河系仰ぎ明日へ満ちた顔

又一つ情緒の消えるビル工事

三代を刻んで今日も鳴る振り子

和歌山市 桑 原 道 夫

てのひらに自分を愛す石のせる

表彰式コンロと首が落ちそう

はっぴーえんど女の自尊心満たす

和歌山市 松 原 寿 子

海鳴りが背なに鞭打つ日の失意

耐える事慣れて人形の顔をする

嬉しさを打ち明けた日の三面鏡

寝屋川市 柴 田 惠 美 子

ぬるい湯へ素直な反省溶けている

大船にのせて貰って重い義理

針ふくむ言葉に気付いてる失意

竹原市 鈴 木 かつ子

もう一度出直し出来る世がほしい  
又せわし障子をやぶる孫が来て  
打ち明ける友にもあつた悩みごと

八尾市 納 史 葉

端正な男の鬼をみてしまう

人を恋うオンザロックが薄くなる  
とぼとぼと失意の影がついて来る

唐津市 岩 崎 実

小さきことその小さい事に悩まされ

心の眼美しきものひそめ持ち  
あわただし世相にからむ派閥劇

唐津市 三 浦 ひろ坊

身代りのネズミもピーナツ食っていた

国民が国民春斗に蹴飛ばされ  
石一つ据える庭師に日が暮れる

新宮市 西 尾 功

あだ花となりて灯ともす五十坂  
除州除州と軍歌胸うつ夜の雨

童心に帰るれんげを子等と摘み

唐津市 岩 下 照 沖

青葉風汽車が汽車待つ山の駅

雨晴れて十坪の農園撫でさする  
父の背我もそむきし子の一人

滋賀県 柚 木 踏 草

道迷いながら父としての指揮

逢いにゆく夜更けの雨はミルク色  
ぼつねんと振られた夜に匂が生れ

兵庫県 高 橋 近 江

経験が化学に勝った苗作り

口数の陰に本心隠してる  
黒一点照れる若さは未だ残し

大阪市 中 辻 千 子

金婚へ指折る夫婦の幸祈る

金婚のもう髪の毛を染めていず  
金婚の顔を鏡に問うてみる

羽崎市 三 宅 ろ 亭

踊りの輪これより大きくならず過疎

老化現象へ逆らってる頬の鬚  
カビ生えた論理抱いて六十年

鳥取市 岸 本 無 人

汗流すことを忘れて愚痴ばかり  
落したら割れるとつばに格を付け  
目印はこれか成るほど小さい家

堺市 栗 本 藤 持

われのみが病むかの如き便り来る

花も見ず病みて失う余生の日  
生きている証し互に筆を執り

姫路市 大 原 葉 香

同じ土赤白黄の花咲かせ

軒雀朝の目覚めをせきたてる

夜のとばり今日一日の無事包み

大阪市 欄 蘭

大物に病院と言うかくれみもの

野良犬まで僕の弱腰読んでいた

ライバルの好意口惜しく受けて置き

竹原市 鈴木 かつ子

親馬鹿を笑う私もその一人

ぬくもりを残して母のうしろ影

満足の酒へ夫はもろく酔い

美唄市 青木 仙人

肩書をとれば素直な父になり

平凡に生きるためにも金が要り

わが短所知らずに生きるのも哀れ

吹田市 藤原 世史春

無差別というほど恐い兇器ない

あじさいの寺 仏さま忘れられ

片言の言葉 真実語る孫

八尾市 土井 鹿蔵

燃えつきたかばねそこには舍利一つ

泉佐野市 大工 静子

人生の下り坂寄り路もなく

巻き込まれたくない話 下に座す

八戸市 島田 昭治

愛される国鉄夢の中のこと

唯一の資本五尺の身体です

羽曳野市 岩橋 双虎

惚れている証拠と妻にさからわず

大丈夫ですよとお義理で来た見舞

転ばないダルマになって瞳を貫い 名古屋市 大林 曲ん手

慕われて好かれて老いの正誤表

須賀川市 平栗 金太郎

素裸になった男にある度胸

茅屋の気安さ月を抱いて寝る

東大阪市 加藤 千代子

読む暇が出来た頃には目がかすみ

後追いをせぬ孫になりもの足りず

大阪市 堀口 欣一

炎天に西瓜をさげて妊婦服

女傘さして青葉の御堂筋

倉敷市 松井 俊風

盆が来て今年も同じ妻の愚痴

腹立ちをぶつつけられる母がおり

宝塚市 吉田 笑女

孫抱ける倅せ腕の痛みなど

夕焼け雲母娘を染めて登り道

鳥取市 勝山 紫宏

漢方薬拌む心ですがりつき

縁談が有るうち花と持ちこまれ

ミシンの音軽く新婚の嫁がいる  
青簾京の料理に京言葉

裏の裏考え過ぎて馬鹿をみる  
白髪染む友の気持の解る齡

職安へ通う消え去るとこもなく  
電卓が計算嫌いに拍車かけ

ブルドーザー自然を犯す音で鳴り  
山坊の籠に打たれる音はげし

コンピューターにない心使いが妻に有り  
再会に胸の古傷思い出し

個性かくして鏡の前に立って見る  
誤字あて字で息子から来る無心

高官も金の成る木は好きとみえ  
ない袖を振れば倒産切り抜ける

悲劇また興味本意に取材され  
学歴は問わず賃金格差つけ

堺市 堀 畑 日々子

岡山市 池 田 半 仙

尼崎市 大 垣 たもつ

備前市 武 内 雅 堂

岡山市 柳 原 孝 柳

高槻市 山 田 スミ子

唐津市 山 下 勝 一

唐津市 田 中 紫 浪

鳥取県 加 藤 茶 人

落鮎に俺の縮図を見る思い  
仕舞い風呂流して妻の座に安堵

もう少し頑張ってみよう鮎解禁  
ボーナスの安全輸送妻護衛

はしご酒になって本音聞かされる  
目減りでもすがりつきたい小銭貯め

世話をする手を知っている小鳥  
剪断の未熟が恐い庭の松

ことさらに子の手の届く玩具売り  
白雲にしこりも溶けるピクニック

発禁で宣伝効果狙う気か  
表彰状一枚苦勞癒えはせず

妻拗ねてカップスノードルする羽目  
炊事洗濯面倒臭いから嫁かぬ

今朝も又新聞が来ぬ瀬戸の霧  
誰が金出すか公約勇ましい

金婚ともなれば夫婦も空気です

東大阪市 浜 地 清 松

岡山市 井 上 柳 五郎

尾鷲市 渡 辺 伊 津 志

弘前市 小 山 内 貞 男

新潟県 高 野 不 二

今治市 今 井 松 花

今治市 古 野 伶 人

大阪市 須 浦 つ ね

老いの身に軽い草履のプレゼント

大阪市 今井隼人

発車してベンチの傘を思い出し

新妻の寝言うれしく驚きぬ

大阪市 田 淵 晴 子

ターミナル傘ともなれり俄雨

検問所押した拇印の重荷かな

西宮市 山 田 喜代子

金婚のじいちゃん腕を組みたまえ

肩掛けの温くさ娘のプレゼント

大阪市 野 田 君 枝

中元に心の信号確かめ合い

子を育て親の愛情たしかめる

青森県 荒 田 つる

家柄に馴染めなかつたと飲む女

三度目も賢い妻の機智ですみ

出雲市 高 見 鐘 堂

出雲弁まじえて神話をニツ三ツ

貸金庫よりも信用のおける妻

岸和田市 池 田 香珠夫

咲き誇る牡丹の下の捨て小犬

母の指紋ついた草餅届けられ

今治市 園 部 正 則

腕前をみがいて来ると出たまんま

あべこべでもおかしくはない抽象画

寝れぬ夜は子の声を聞く電話

唇には触れずうれしい日を決める

鳥取市 有 田 鹿の子

欲しがらぬ妻もウインドに行つたなり

慌て過ぎかけ込み乗車逆に乗り

尼崎市 駒 村 岳 麓

実らない恋だからこそ美しい

ぎすぎすと己れに賭けてくたびれる

今治市 薦 本 昌 道

おふくろの味電化で解るまい

狭い軒老舗の誇り失わず

河内長野市 井 上 喜 醉

御みこしがゆれる神様あどけない

核家族知らず紫陽花咲き誇り

尼崎市 中 塚 喜 甲

私の鏡は他人に預けよう

どの指も見事に狂う指人形

豊中市 高 橋 古 啓

思い切つて書類を捨てるのも定年

定年へ軽い気持で残すメモ

櫃原市 西 本 保 夫

急ブレーキ吾が子でなくてミシン踏み

農業に負けそう推肥汗で積む

唐津市 松 垣 岩 光

山口県 高 崎 雀 声

アルバムの笑顔苦しい頃のもの

阿呆になる智恵すら濁れてただ老ゆる

褪せたバラ捨てる我が身にひき競べ

夕焼のビルで泣いてるアドバルン

近づかず遠のくばかりマイホーム

金婚祝い温泉行きをプレゼント

長身に肥満カップル組ます神

枯れ芒新葉の蔭に消えて行き

おふくろの味は時間をかけたダシ

魚が水得たよう妻の台所

特価品たくさん財布は軽くなる

学研がママに勉強させている

鏡ある限り人間うぬぼれる

大阪市 新川 貞祐

西宮市 朝山 千世子

広島県 原田 篤史

橋本市 森脇 善彦

大阪市 内藤 ますえ

橋本市 岩倉 天彦

今治市 真山 国彦

今治市 伊藤 一郎

今治市 大本 バット

大阪市 平井 露芳

唐津市 田口 虹汀

松江市 黒目 大鳥

無所属という図太さで押しとおす

世代の差 同棲さりと語られて

共鳴の詩は底辺の温み

別荘の今は人手の藤の花

閑日をむさぼる裏に不安持ち

夏祭り洋服姿がやぼったい

愛憎の涙の底へ花が散る

今治市 原田 琲珈俚

豊中市 出口 セツ子

八戸市 安田 紘

倉敷市 高山 みどり

羽島市 伊藤 静枝

寶屋川市 福富 隆子

島根県 飯塚 虎秋

中島生々庵

西尾 葉

若本多久志

川村好郎

菊沢小松園

暑中お見舞い

申しあげます

# 百人一首と川柳

(26)

## 富士野鞍馬

### 八一 後徳大寺左大臣

ほととぎす鳴きつる方を眺むれば

ただありあけの月そのこれる

この歌は「千載集」夏の部に「晩に郭公を聞くと言へる心を詠み侍りけるに、右大臣」と詞書してのせられてある。左大臣になる前の作である。

そのころの人々に、時鳥の憧れは、現今の人々の想像もできないくらいであった。その年の時鳥の鳴声をはじめて聞いた者は、人々からうらやまれたもので、それは江戸時代まで続いた。百人一首中で、この時鳥を詠んだのは、後徳大寺左大臣だけである。それを川柳は詠んでいる。

百人の内で明け方一人聞き

ほととぎすぐつと末座で一人聞

ふつていき三千百の内で五字

二四六

川鳥(二八八)

土地がらで小ぐら山にも一羽きり  
一口(天六鶯2)

小倉山冬瓜の花に時鳥  
花菱(天七鶯1)

一冬瓜の花の百一という諺  
京にすくない鳥百に一つなり  
マイタ(六八鶯)

時鳥なきつる方は北野なり  
一(二二2)

一 小式部内侍  
百人の中へ一声ほととぎす  
八十一人目ほととぎすめつつけ  
五連(天七鶯1)

二声と諦かぬ小倉の郭公  
二(二二3)

初音を聞た人百人でひとり  
一(二二4)

鶯のまま子を一羽集に入れ  
猪牙(宮二六乙)

梅水(二九2)

鶯はないがままつ子集に入り  
竹子(四〇1)

一時鳥は鶯の巢へ卵を産んで鶯に育てさせる。百首中に鶯はない。

有明は四つ一ト声ほととぎす  
竹子(二五四1)

一有明を詠んだのは、後徳大寺、素性法師、壬生忠岑、坂上是則

有明もただ有明も名歌也

梅枝(二八2)

定家卿四五月頃の月も入れ

(如雀四七39)

下の句は月へゆづつてほととぎす

(二六7)

つんぼうは唯有明の月ばかり

梅子(三三29)

火入にもまだ有明のほととぎす

横好(五六29)

ほととぎす有明たどん残つてゐる

五帆(二二34)

ほととぎすしかも左の大臣読み

美徳(二二25)

ほととぎす見なくす迄は眺めてゐる

梅枝(傍四13)

時鳥きいたは後徳大寺なり

(二四8)

百人に寺のつくのは一人也

梅鳥(七六37)

鳥だに後徳大寺は目を眺め

ヒツメ(一五〇2)

後徳大寺に鍋公家の掛り人

祖山(二四〇2)

後徳大寺あきれたつらを蚊に喰れ

一八(二一三三)

ほととぎす月をも見せず嫁は取り

(拾初八)

一歌カルタ

後徳大寺左大臣は、右大臣公能の子藤原実定で、祖父の実能を「徳大寺左大臣」と呼んだので、「後徳大寺左大臣」と呼んだのである。治承元年(一一七七)大納言左近衛大將、寿永三年(一一八四)内大臣、文治二年(一一八六)右大臣、同五年(一一九〇)左大臣となった。そして建久二年(一一九一)五十三才でなくなった。「平家物語」に「徳大寺殿鳥詣の事」が書かれてある。

## 八二 道因法師

おもひわびさても命はあるものを

憂きに堪へぬはなみだなりけり

(千載集)

道因法師は、俗名を藤原敦頼といひ、治部承清孝の子である。崇徳天皇に仕えて、従五位上右馬助となったが、出家して道因と改めた。没年はわからないが、九十才ぐらいまで長命したようである。

源俊頼(七四)の書いた「無名抄」によれば、八十才になるまで秀歌が詠めるようにと、徒歩で住吉明神に毎月詣でたといわれている。「千載集」には二十首も入選している。

花嫁のうきがともに百人一首 (九七)

という川柳は、この歌から詠んだのである。

## 八三 皇太后宮大夫俊成

世のなかよ道こそなけれ思ひいる

やまのおくにも鹿ぞなくなる

(千載集)

俊成は定家(九七)の父で、権中納言俊忠の子である。はじめ母方の祖父藤原顯輔(七九)の養子となり、名を顯広としたが、のち俊成と改めた。後鳥羽天皇に仕えて、正三位皇太后宮大夫となった。五条室町に住んでいたので「五条三位」とも呼ばれた。晩年に出家して釈阿といったが、元久元年(一一二〇)四十九才の高齢でなくなった。

歌は、藤原基俊(七五)に師事したが、源俊頼(七四)の歌風も学び、歌壇の重鎮となり、これを統一する地位に立った。その主張するところは「幽玄体」であった。文治三年(一一八七)後白河法皇の院宣によって「千載集」を選進したのである。

御父子して千と百とを御ゑらみ

是亦(三六七)

一子の定家は百人一首を選

この「千載集」については、平忠度の

さざ波や志賀の都は荒にしを

昔ながらの山桜かな

が入選しているのを、川柳はいろいろに詠んでいる。

志賀と名こそは源平の山桜

巨眼(八二五)

一源義家「吹く風をなこそその関とおもへども道もせにちる山ざくらかな」

住の江(ヨリ三二二)

千載に日陰のさくら一本入れ

カテウ(二九四)

千載へただのりたがる執心さ

箕山(四四二九)

山桜百にはもれて千に入り

巨眼(八二〇)

山桜狐川よりかへりさき

升丸(一一三三〇)

集に飛入る千載の狐川

叶(一一六二四)

一忠度は一門と西国へ逃げる途中狐川から引返し、五条の俊成邸の門を叩き、自選歌百首余を書いた巻物を托して落ちて行った。

千載にてんぼう百人に目くら

雨澤(傍二一九)

千載集へてんぼうも入れるなり

(安九松四)

一てんぼうは手ん棒で、手や腕のないものこと、忠度は須磨の戦で腕を落された。

朝敵の志賀を隠して集に入

如雀(五二四)

忠度をただのせて置く和歌の巻

梅雨(五三二〇)

一読人知らずとして入選  
なお文句取りに

此さきに道こそなけれ袋町

蛙柳(二四〇九)

# 愛染帖

## 正本水客選

父退院 あれもせいこれもせい  
伴から おはよう朝がはずみ出し

鳥取市 勝山 紫宏

思春期の眼が辛辣に母を刺す

大阪府 小出 智子

心の傷癒えないままに雨季に入る

大阪府 黒田 真砂

鎖引きずって女の旅の果てしなく  
たかぶりの素足 芝生を強く踏み

大阪府 黒田 真砂

派手好きな男のたてる花火筒

滋賀県 柚木 踏草

草笛の太郎と花子手をつなぎ

岸和田市 池田 露子

人間国宝となつてから透きとおる

鳥根県 錦織 文字

大勢の中の一人の瞳を探す

八尾市 高橋 夕花

遺言をかき悪人と署名する

八尾市 香川 酔々

蘭蝶へ雨が泌みいるように降り

道づれに亡母の思い出は話さない  
聴診器 女医の失恋洩れてくる  
誠実な一言ふんぎりつけさせる

高槻市 若柳 潮花  
八尾市 宮西 弥生  
和歌山市 野村太茂津

受話器置くチャンス待つてる友の愚痴

大阪府 神夏磯道子

子につなぐ夢を断ち切るときふたり

倉敷市 水粉 千翁

雨しとど受話器の向うも雨ときく

堺市 高橋千万子

歯の治療進まず梅雨に入るニユース

今治市 高本 昌道

二の舞いと知つて情にほだされる

和歌山市 津田 与史

予言した恋に女が墮ちてゆく

東大阪府 竹中 肖二

地平線僕が逆立ちするところ

西宮市 藤村 ベ女

どしや降りに困つた顔でいる蛙

豊中市 高橋 古啓

三面鏡のどれにも私の貌がない

尼崎市 黒川 紫香

蠅取りにいずれかかると見えていたり

今治市 原田琲珈俚

つかれきつた夕陽ビルにつぶされた

橋本市 森脇 善彦

一人きりになると分身が動き出す

京都市 都倉 求芽

たどたどしい亀の真面目が悔れぬ

神戸市 小浜 牧人

六月の晴れ間に背伸びする善人

和歌山市 桑原 道夫

雲の峰 若手の方に席を占め

大阪府 川口 弘生

尼寺の縁へ沈んで梅雨に入る

和歌山市 若宮 武雄

透明人間ばかりだったら夢こわす

島根県 榊原 秀子

郵便の来ぬ日もできてきた落ち目

鳥取市 河村 日満

爪立ちもできぬ不等辺三角形

島根県 小砂 白汀

非運の時ほど女強くなる

東大阪府 竹中 綾女

ゴキブリをつまんだ指を洗い抜く

八尾市 大路 美幸

ひと眠りこれも尊いわが時間

堺市 栗本 藤持

言い度いこと言わず数字で攻めてくる

新宮市 大矢 十郎

あの世から妻にぶざまをまた見られ

青森市 工藤 甲吉

大掃除 大きなゴミになって隅

鳥根県 堀江 正朗

花の手入れも虫も花が好きらしい

唐津市 岩崎 実

朱の橋の手前で曲る旅ひとり

大阪府 宮尾あいき

乳房ひとつ失いし友から勞られ  
竹原市 三宅 不朽

待ち呆け電光ニュース皆憶え  
高根根 堀江 芳子

地震から逃げ切れませぬ蛇の知恵  
大阪府 欄 蘭

脇き路の蟻 本流復帰ひまかり  
今治市 古野 伶人

のんびりと遠雷を見るビルの窓  
羽咋市 三宅 ろ亭

掛け持ちの仲居を便乗させて事故  
今治市 原田 一風

行政のこんなところのアスファルト  
羽曳野市 今井 松花

大臣の遊説阻む瀬戸の霧  
今治市 岩橋 双虎

子の道へ過保護の砂をしきつめて  
唐津市 真山 国彦

終着のない汽車 妻と俺の汽車  
松江市 岩下 照沖

夏は来ぬ梅雨の湖面の藍紋り  
富田林市 岡崎 祥月

敗者復活 僕は敗者に似た離職  
東予市 岩田 美代

梅雨雲の低く闘病気づまる日  
大阪府 小山 悠泉

処方箋あれば上げた恋病  
和歌山市 西出 一栄

久振り通りことばはもの足りぬ  
藤井寺市 松原 寿子

五月晴 わたしを生んでくれた空  
島根県 西 いわを

オルゴールにつながる記憶少女もつ  
岡山県 岩田 三和

岡山県 出原 敬一

その中に青い目もいたデモの列  
今治市 小幡 里風

周囲みな敵に思える日の虚勢  
和歌山市 西山 幸

音なしの構え無口の不発弾  
和歌山市 沢山 福水

喋る種 食う種つきて女去に  
和歌山市 梅本登美也

煙草吸う奴も二本で手が足りる  
伊丹市 樫谷 漫柳

老人会 桜の苗木墓地へ植え  
兵庫県 高橋 近江

色も香も百パーセントと言う女  
岡山県 直原七面山

ぬるま湯の中に演出された貌  
徳前市 武内 雅堂

嬉しい日の贅沢すき焼に肉はずむ  
大阪府 西川 誓二

落慶へ法衣が映える西の京  
大和郡山市 森田カズエ

ポケットに裸銭が落付かず(遺詠)  
高槻市 山田 季贊

鮎釣りは他の魚川に投げ返えす  
岸和田市 池田香珠夫

お若いと言われ満足そうな母  
貝塚市 行天 千代

異人作る博多人形 異人に似  
今治市 関部 正則

悪人がいてお芝居の幕があき  
唐津市 山下 勝一

蟬時雨 若く逝きしを惜まれる  
羽曳野市 麻野 幽玄

早苗振に植ぬわたしもお手拍子  
倉敷市 高山みどり

用心をすれば吊橋はでに揺れ

真黒に日やけて試歩のズック靴  
唐津市 檢垣 岩光

彼女のもペアーで編めと  
今治市 大本バット

夏枯れも季節の内と大旦那  
東大阪府 加藤千代子

我がドラマもうチャンネルは変えられず  
今治市 伊藤 一郎

そこまで来たから寄ったと核家族  
岡山県 池田 半仙

畦道の花は公害知らず咲き  
高根根 太田 亀甲

預金には手つけず済ます金ほしい  
山口県 高崎 雀声

自民党 遠心分離してみたし  
出雲市 板垣 夢酔

黒い霧 襖とはまたご奇特な  
平田市 久家代仕男

あじさいの色にふくらむシヤボン玉  
亀岡市 森 和堂

捨てられた手毬 女を匂わせる  
今治市 月原 宵明

吊橋が揺れて素直になつてくる  
柏原市 小谷 葉子

暑中お見舞い申しあげます

正本水客  
橘高薫風

同人吟

# 秀句鑑賞

前月号から

浜田久米雄

年頃の娘へ父の距離がある

川上 大輪

年頃になった娘はもう昔のあどけなさはない。昔手を引っ張って連れて歩いた娘は既に成熟してて手をつなぐどころか一步か二歩の間隔が必要である。それは父という男と娘という女との間に画された一線であろう。捨てがたきものに巨大な耳の垢

高杉 鬼遊

誰しもが同感の意を表わす日常の身辺事であると思う。巨大ながらと大げさであるが普通の粉のような垢ではなく時には音を立てたりして出て来ることがある。これを見た時手のひらにのせたり机の上に置いたりしてしげしげと肉体の神秘を眺める。これは偽らぬ人間のころである。

棟梁の音痴最後をしめくり

高橋 操子

棟梁と言ってもみなが歌の上手なものばかり

りはいない。中には歌えないものもあるわけだがそこは商売でどつきりにとって置き歌を短かく歌って棟上げなどをしめくくることがあろう。これがやはり棟梁の貫禄である。

爪を切る女ちかごろ絵にならず

山内 静水

絵にならぬのは和服が減った証拠である。浮世絵は爪を切る女の艶を濃艶にしていたが、今の洋服はその艶もなければ仕事も大胆である。誰が見ていようとあっさりしたもので絵にならぬと不満を持つのは男の持つ心であろう。

田植機を押しして農夫に唄がない

恒松 町紅

昔の田植風景といまの田植機の唸りとは全く大きな相違がある。何軒かが組んで何日もかかっていた田植にはがやがやとした中に味があつたが、いまはそうではない。一人が運転して一人が植えてゆく味気なさである。この唄は張り合いとでも解釈しておこう。

憤懣のやり場亡妻へ鉦たたく

福田 豊作

妻に先立たれた男がいかに淋しいものかはその身になって見ないかわからないものらしい。たとえ妻が病氣をしていてもやはり生きていてくれる方がうれしいとは友人の話である。この句はそうしたやるせない男の気持を鉦をたたいてまきらわすあわれさである。

ころんだ子おこして嫁に叱られる

西村 早苗

ころんだ子をおこしてやって叱られたので

は歩に合わぬが、この頃の教育はころんだ子が起き上るまで放っておく方がよく、いつまでも親の手を借りていては駄目だということになっていくからであろう。もっとも昔から獅子は子を谷間に蹴落すという訓えもないではないが。

百姓をやめろやめると家が建ち

越智 一水

終戦時の田や畑に建って来た家を想い出して見ると随分建ったものである。そしていまでもどどん建っている。田を売れば百姓は出来なくなるが、それでも毎年米が余っている日本はまだまだ広いような気がする。

縄のれん女の嘘に逢いたくて

榎田 英詩

縄のれんの奥でしゃべっている女、縄のれんの商売上がやがやと言葉のやり取りの中で儲けている。そのふんい気が好きなか女の顔が見たいのか出かけゆく男の気持である。茶碗置く音のまるさや有難し

堀江 正朗

円満な句である。音で茶碗のまるさを感じる作者の気持はみんながわかってくれるであろう。茶碗の丸さたのしみに満つ 山雨楼の句を思い出し、人は生れてから死ぬ迄丸い茶碗とともに生活をしつづけるのである。

水煙抄

秀句鑑賞

前月号から

小浜 牧人

円満な顔して他人と逢う夫婦

小谷 清女

デリケートな夫婦の心理である。中年を過ぎると夫婦の間にも生活上の色々な問題が起り意見の対立することが出来てくる。これが引いては愛情に亀裂が入ることも成り兼ねない。そんな冷戦状態にあっても他人と会う時には左様な素振りはおくびに出さないで如何にも睦じように振舞うのである。処世上夫婦このようなうしろめたい演出もしなければならぬのである。この句、円満な顔して、がいのちである。

昨夜の事忘れなさいと陽が昇る

小山 悠泉

朝日が明るく力強い姿で昇ってゆく、爽やかな朝風だ、今日も元気で頑張ってくる。強い意欲が湧いてくる。昨夜は不愉快なトラブルがありあと味の悪い思いが残っているが昇る朝の太陽に向っていると何時までもそん

な事にこだわりを持つ愚かな心の狭きはずかしくなる。もう終わった事はさっぱり忘れて心新に今日へ向って前進してゆかねばならぬと気付くのである。

石仏の無言が心へ語りかけ

西山 幸

長い歳月の風化に耐えて石仏は移りゆく人間界の姿もじっと眺めて立っている。歴史の流れの中には数々の天災が動乱が又幾多の興亡が繰り返えされた。その都度難を受けた不幸な人の数は夥しい。救いを求めて石仏の顔を訪れた人も数知れぬほどであった。

句主は今この石仏と対座して過去を偲び現在を思い未来へ如何に生くべきか無言の仏と対話の形で自問自答しているのである。

4Bで書かれた嘘は消しもせず

桑原 道夫

4Bは新聞や雑誌等ジャーナリストの使う鉛筆である。往々にして4Bは事実無根のデマや心小棒大に誇張した記事をセンセーショナルに書き立てる。この記事が誤報や捏造であると判つても容易に訂正しようとはしないこれに依つて損害や迷惑を蒙つた人の事は無視され勝ちになる事が多いのである。ジャーナリズムの独善的な横暴に対してこの句は頂門の一針である。

若竹のひと節ごとにある気魄

杉浦 婦美子

サトウハチローの色紙の詩に、伸びる。ただそれだけを考えよう。と言うのが。若竹が真直ぐ空に向つて伸びてゆく姿が正にこ

れである。一節一節背を伸ばしてゆく力強さにあの爽やかなみどりの若竹が持つ気魄のよなものを感じられる。

働けばこんなに素晴らしい夕陽

鈴木 かつ子

一日を元気に事故もなく働き終えた満足感があるから夕陽が素晴らしいのである働けることの偉さをまた明日へつなぐ励ましの美しいプレゼントの素晴らしさである。曾て私が舞子海岸で療養中療養の屋上から有名な播磨灘の落日を毎日眺めたものである空と海と島々を七彩に変化させた沈む夕陽は誠に見事であった。然し療養中の身にはこの眺望も落日の悲哀感がひしひしと胸に迫つたことをこの句を読んで対照的に思い出した。

母の日のクレパス偉大な豚を描く

柚木 踏草

微笑ましく明るいホームドラマの見えよう。母と子の温い心のつながりが目に見えるようである。頭に角を描かれる教育ママと違つてこのお母さんは大らかで子供を信じ子供に過重な負担はかけないだろう。母の日に何よりの朗らかな笑いをプレゼントされたのである。

他に印象に残った句

十字架を胸に生涯鶴を折る 小谷 葉子

本当の甘さは塩が知っている 江口 渡

母の壺泪と汗と梅干しと 高橋 古啓

連休に自書をせよと言う雨か 今井 松花

沢庵も底になるほど味が有り 荒田 つる



## 失った何か

—山田季賛君逝く

正本水客

山田季賛君がとうとう逝って了った。去年の永尾英断君に次いで賑やかな名物男がまた一人減った。

私とは特に個人的な付き合いは無かったが、一体いつ頃から川柳に顔を見せるようになってみたんだろうかと古い句報などを引っ張り出してみた。同君は滋賀県の産、大正15年5月15日生れだから丁度50才に手が届いたばかりである。

昭和23年秋頃、初めて季賛の名が出てきた時には福野の姓だった、いつ頃、何の理由で山田になったのか、もう聞いてみる事は出来ない。ちよつと意外だったのは26年5月という早い時期に春巢さんの推せんで不朽洞会員になっていること。36年夏に肝臓炎で一度倒れているから、それ以来持病の一つになったのかも知れない。

一年間の句会出席二六三回というレコード

を平然と作ってみたり、広島から逢々毎月、大阪の本社句会に年間皆出席をやつてのけたり、ひたむきな同君の一面が思い出される。

仕事と川柳のあいまを見付けてはと云うより無理にも結びつけて九州、北海道、徳之島と忙しく駆けまわっている。宮崎の小林だ、岐阜の中津川だと陰陽石の写真を撮ってきては借しげなくバラ撒いて澄ましていたのは知る人ぞ知るである。

46年頃から入院、退院の繰り返して、もう快方に向つた頃だから一度見舞に行こうかと思つていると（私は特別の場合を除いて病いの重い時の見舞は控える事にしてている）先日から職場に復帰して軽作業をやっていますと連絡を貰つて驚いたことが一度や二度ではない。君一人いなくても国鉄は潰れないんだから徹底的に体を直すようにと口を酸っぱくした事も今は無駄になった。

去年の一月、食道静脈瘤で入院手術、一時小康を得て5月の英断君の告別式にも篠山まで出向いて呉れたが今年になって再手術、6月20日ついに起てなかつた。その入院中も医者から鉛筆を持つことも禁じられていますと書きながら、投句を止めなかつたのにはこちらがハラハラさせられた。

句を少し拾つて君を偲んでみることにする秋はよしミシンの位置をかえて踏みお隣りにやりくり習う妻若し

新婚時代の作であろうか。

安住の地を決めタンポポ根をおろし

親子して新幹線を造る職

長男幹雄、東京第三工事局への前書がある。

同君にとって一番心の安定していた時代であろう。

あて先の誤字そのままに無事届き

熱帯魚と同居 田螺はホツとする

何となきキューモアもまた氏の一面である。

心臓の強さを医師がほめてくれ

一日が大切と知る病むベッド

他人から見れば気楽にみえる病上り

最近の句は病気を対象にしたものが断然多い

今年の5月、川柳塔に発表された

失った何かを求めてひとり旅

は今にして思えば、君の辞世の句であつたよ

うな気がしてならないのである。

川柳馬鹿の君よ六月の雲になれ

合掌  
水客

中 元

清水一保選

内助の功内緒で中元贈っとく可住  
 のし紙が交わり中元二度務め軒太様  
 甘覚にお酒ばかりくる中元登美也  
 中元のコマシヤル夏だなど思い道子  
 中元も物価上昇率を掛け一風  
 仲人に中元が来る睦まじさ伶人  
 夏羽織着て中元の使者にされ一郎  
 播かぬ種は生えぬと高価なお中元七面山  
 喜寿近く贈る宛なきお中元貞祐  
 中元に表も裏もない誇り白水  
 中元の礼状妻に書かせとき春日  
 ライバルに先手越されたお中元岩光  
 お返えしの要る中元に気が疲れ伊津志

中元も来ない露路裏黄昏れる思月  
 名前ト忘れかけたお中元双虎  
 中元の品が不況と別に売れ芳仙  
 中元も来ず汚職には遠い地位素身郎  
 表戸を中元のせて初夏の風洛醉  
 仲人に恩を忘れぬお中元悠泉  
 中元の中味をしやべるお人好し踏草  
 中元を見越して砂糖買控え紫宏  
 故郷へ添書きをするお中元道夫  
 御中元達筆程で無い中味右近  
 中元の数に定年自覚するどんたく  
 お隣りの留守へ中元また置かれ本蔭樺  
 中元の額家元がきめてくる潮花  
 不況カゼ吹いて中元たじろかずひろ坊  
 中元を提げれば裏口開けてくれ洋々  
 中元へ心ばかりの品を揃る祥月  
 中元のバイトの汗に育つ夢重人  
 感謝する気持のかようお中元弘朗  
 中元の下見に妻の供となり無人人  
 中元の角ピン封切るいい知らせ茶人

停退の道へ中元細うなり雅風  
 思わくは外れ中元だけとられ翁童

住

お歳暮へ加減乗除してお中元弘生  
 お中元あがれあがれと酒になり豊生  
 お中元困りましたと云う笑顔春雄  
 銀行の中元の来る程も借りバット  
 捨てる子のように中元置いて去に木魚  
 将を射る中元静かにブザー押す天彦

人

お中元心の垣根取り払い近江

地

お中元に先客があるすだれ越し代住男

天

お中元珍種の犬に尾を振られ照沖

袖

ライバルが有り負けられぬお中元

★

▼郵便事情で締切日までに到着せず、発表のおくれたことをおわびいたします。―編集部

寢不足

出原敬一選

寢不足がミスばかりする昼下り  
徹夜した夫へ妻の思いやり  
起すまで寝ても不足な顔で起き  
寢不足を下座の椅子にさきやかれ  
原因は寢不足だった車事故  
ハネムーン帰りの汽車は寝て過ごし  
寢不足の顔が屋台で活気づき  
寢不足の板前鉢巻ききつく締め  
寢不足を重ねて医師の世話になり  
寢不足をタイムカードは知っている  
飲むことになれば寢不足気にならず  
寢不足のむくい一駅乗り越し  
寢不足が二度も三度も眼鏡拭く  
寢不足を隠す朝の薄化粧  
寢不足のわけを知ってる旅かばん  
寢不足をとり戻してる里帰り  
寢不足の顔もまじっている写真  
寢不足へ突貫工事日々続く  
旅装解く昼へ寢不足ドット出る  
寢不足の苦闘ノルマの用途がつき  
寢不足も女一人で生きる職  
寢不足の皮膚へ白粉塗ってこず  
重患の看護寢不足強いられる  
寢不足も覚悟の上の受験の灯

寢不足の頭に残る彼女の名  
寢不足の車掌に始発の幕があき  
寢不足の目にぼんやりと昼の月  
寢不足と云う瞳に涙の跡が見え  
寢不足の乳房は癒えた児に任せ  
味噌汁のネギ寢不足に活を入れ  
講議する教授の顔がゆらぎ出し  
寢不足の瞳にボンボリは雨に濡れ  
乳飲まず母寢不足を苦にもせて  
寢不足の看護起こさず耐痛痛み  
寢不足の顔を議場で写される  
新米のママ寢不足の日が続く  
寢不足を今日も手形が追っかける  
寢不足の罪をまふたが詫びている  
寢不足の声で妥結を発表し  
寢不足の孫一瞥を呉れただけ  
寢不足の車窓に朝の富士が見え  
懊悩の日々寢不足のつづく恋

七面山  
重人  
右近  
満津子  
弘生  
伶人  
伊津志  
一風  
貞祐  
松花  
道子  
登美也  
和堂  
信二  
漫柳  
照沖  
茶人  
昌道  
敏  
バット  
踏草  
国彦  
思月  
芳仙  
ひろ坊

金婚

落合思月選

寢不足の一生だった櫛の母

人生の荒波乗越え来た金婚  
金婚に古びた愛を温める  
なれそめをもう金婚は憶はず  
金婚式茂の道を乗り越えて  
金婚のまだこれからと云う余生  
金婚へ一花咲かす事業慾  
金婚へ喜寿が重なる桜鯛  
金婚に漕ぎつけました夫婦舟  
密月の契続けた五十年  
喜怒哀楽二人に夢の五十年  
老醜を旁り合って嬉しい日  
山坂の苦勞を夫婦手を握り  
金婚はいも蔓食った日を偲び  
金婚の夫婦揃って京詣り  
最高のしあわせ夫婦五十年  
いろいろのことがあつたる金婚式  
金婚の守神様へ寄付の石  
金婚の祖父母手本に嫁がせる  
金婚の坂もいたわり忘れない  
寄り添うて上座の金婚少し照れ  
ロマンスを金婚式にぶち開ける  
肩の荷を降した夫婦の五十年

保夫  
喜道  
昌風  
つね  
曉明  
悠泉  
里風  
右近  
近江  
千子  
カズエ  
秀峰  
本蔭  
亭  
一郎  
鐘堂  
松花  
正則  
軒太  
魚山

長かつたでしよう和金婚祝われる  
 五十年倦きも倦かれもせず生き  
 金婚の席へ鳩が迷いこみ  
 金婚への的を定めてまっしぐら  
 お互に五十年の不作やつたかも  
 金婚式まだまだ家督譲らない  
 金婚の二人静かにお茶を飲み  
 金婚に興味も一緒の妻と居て  
 金婚式おしやまな孫にからかわれ  
 金婚へ浮気の過去を耐えた皺  
 金婚式空あくまでも晴れ上り  
 金婚の心して金婚期を迎え  
 淡々として金婚期を迎え  
 五十年夫唱婦隨の金字塔  
 金婚の盃甘い甘い酒  
 金婚まで冥加に生きた凡夫婦  
 金婚へ膝をくずさぬ父であり  
 金婚式すめばいつもの小言が出  
 生きてたら金婚式だと節まる  
 金婚の夫婦へ座席指定券  
 噛み合ぬまま金婚へ辿りつき  
 金婚の明日へ大きい虹を見る  
 金婚のたまて居ても意が通じ  
 金婚の盃翁媪の顔が照り  
 金婚の夫婦は言葉飾らない  
 再婚の接木同士で五十年一風

軸

別れようと思ったこともある金婚

高 官

新岡回天子選

ステージで高官飯の種にされ  
 灰色の高官の胸うずく夜  
 問題になってる高官名も見えず  
 灰色の高官目覚めの悪い梅雨  
 高官になりたいための二浪です  
 高官を隔てる霧が厚すぎる  
 高官名知って居るよな記事で売り  
 高官と財界繋ぐ閨閣図  
 講堂の高官の額外される  
 高官は庶民の怒りなど無視し  
 高官も結局金に踊るデコ  
 国会空転高官名でモメて居る  
 ハイエナの高官推した地元票  
 高官の遺徳を敬ぶ除幕式  
 政界の謎高官にペン錆びず  
 専用のパイプで高官天下る  
 清流に住んで高官嫌われる  
 高官で無いからわいわいロッキード  
 金と地位あつて汚職に名をつらね  
 高官となれば汚職も桁外れ  
 茶屋酒は嫌い高官つがなし  
 高官の背で汚職の隠れみ  
 元高官会社顧問の二つ三つ

優 正 仙 宵 道 一 松 裕 国 彦 郎  
 則 人 明 子 風 人 花 彦 郎  
 則 人 明 子 道 一 松 裕 国 彦 郎  
 則 人 明 子 道 一 松 裕 国 彦 郎

法の裏高官だけの道があり  
 灰色の世界をワイロが覗かせる  
 高官は夢の又夢小役人  
 高官の趣味面会の順を替え  
 高官の裏街道に裏があり  
 高官に裏の夢ばかり抱持ち  
 高官となつて不運な陥し穴  
 三木退陣せまつて高官名は出ず  
 高官の出番野次の目期待の目  
 口ひげの明治の高官その威厳  
 高官のかばんカメラが追う羽田  
 選挙ポスター高官並べ落選す  
 高官の名刺が利いた低姿勢  
 生き恥を晒して高官野にくだる  
 組板の高官鯉になり切れず  
 外電が又高官に至近弾  
 毒喰わばの心境高官腹をすえ  
 高官の次そのまた次の部下が僕  
 高官の名が出そうなり三木を追え

俊 隆 弘 弘 天 勝 芳 廣 岩 操 曉 悠 肖 綾 女  
 風 子 生 朝 彦 仙 一 坊 光 汀 子 明 泉 女  
 風 子 生 朝 彦 仙 一 坊 光 汀 子 明 泉 女

# 初歩教室

題 — 「土」 —

本田恵二郎

川柳に卒業は無いという先人の至言に共感をおぼえる私であるが、それに追加したいことがある。川柳に定年はない、そして年齢もないと私は思っている。年を重ねれば重ねるほど作家は若返ってゆく、換言するなら、老化現象はない。その最たる見本は、故路郎師に老化現象は皆無であつたし、新しい発見を一生涯続けられたではないか。見習いあやからねばならぬことだといつも思う私である。

土恋しマシンヨソ暮し花が殖え 昌水  
 (マシンヨソの窓に咲かせて土を恋い)  
 農薬と化学肥料で土が瘦せ 無人  
 (農薬と化学肥料へ土瘦く)  
 故郷の匂いなつかし菜が届く 那智子  
 (里の土つけてなつかし菜が届く)  
 役果し葉は本然と地に還り 正則  
 (役果てた葉の私語土が聞いている)  
 ご先祖の守りぬきたい土蔵倉 静子  
 (ご先祖が残した土蔵にある誇り)

土に生き土に死ぬ気の大きな掌 (土に生き土に死ぬ気のぬのたこ)	俊風
ユータンをして土の香が胸にしむ (ユータンの五体を土の香が無でる)	同
土捨てて来てベランダへ土を買い (土捨てた男ベランダへ土を買い)	一本杉
土踏まぬ暮し背広がよく似合い (土の無いビルの谷間の背広族)	同
一坪の土で楽しむ花作り (一坪の土でまんまと咲かせてる)	道子
太陽と土を嫌って都会の灯 (太陽と土が嫌いな都会の灯)	同
そう云えば土の香りの無い東京砂漠 (そう云えば東京砂漠に土が無い)	頼次
浄土行ゆつたり指定席でのつもり (浄土行の指定席はやばや取っておき)	同
土と親しみ胡瓜も茄子も花少々 (茄子胡瓜育てて土の愛を知る)	つた
土と親しみ花と親しむ昨日今日 (土があり花あり老いのころ満つ)	同
土の香をつけて野菜の露天市 (土の香もうれしなつかし露天市)	翁童
土の香がこもる嬉しな里帰り (土の香が童心ゆきさぶる里の道)	同
里帰りおなかの子も土産にし (胎の児を土産に里の門くぐる)	岳麓
退院し土鍋で炊きし粥に謝し (退院の土鍋をそつと撫でてみる)	同
人生に土は古里帰えるところ (人生の終着駅は土だった)	藤持
思い出は土と遊びし幼なごころ	同
(はるかなる思い出土の香と遊ぶ)	サヨ
土掘って土掘って蟻城築く (城築く蟻土掘って土掘って)	同
捨て切れぬ古里の土に亡母がいる (亡母眠る古里の土捨て切れず)	同
父祖が開拓の汗と脂を吸うた土 (父祖の汗土は知ってる笑んでる)	瓢太
土の温みで冬眠の虫春を知る (冬眠の虫へ春よと土が笑む)	同
ローンすみこの土地全部自分のもの (ローン終えた土しみじみと撫でてみる)	日々子
よく笑う娘の集り土臭い (土臭い娘ら健康な笑いもち)	同
キロ売りの土デパートに届けさせ 自然歩道こは土道土がある	貞祐
(うれしさは土があるある草の道)	同
俺の生甲斐過疎の土と生く (生甲斐はあきず育てる過疎の土)	三十四
土の色今年の作をもう自慢 (土彩で作柄を知る精農家)	同
土いじりからぼつぼつの恢復期 土なめてみて熱心な篤農家	保夫
(土の味篤農の勘に狂いなし)	同
土砂降りへ肩を抱き合う迎え傘 マシンヨソに住み土の匂いを忘れかけ	寿子
(マシンヨソに住み馴れ土の香を忘れ)	同
どの指も母なる土を厭わない 祖父祖母の踏んで固めた庭の土	大成
(祖父祖母がせつせと固めた土間である)	同
どろんこになって遊んだ児の寝息 土の手をぬぐって三時の乳のまま	天人

(お三時の乳房へ土の手を洗う)  
雲雀追う日もあり土の匂う手で  
(土の手を休め雲雀の声を追う)  
土にしむ水のところで嫁となる  
(土にしむ水のところで嫁けと母)  
コンクリに憧れ土を恋しがり  
土地つきの夢抱いたまま露路暮し  
(土地つきの夢抱いたまま露路暮し)  
耐えること教えてくれた過疎の土  
雑草の根性土にはぐくまれ  
(雑草は土の温さを知っている)  
土砂降りへ降してバスの知らん顔  
気がつけば敵の土俵で角みとり  
(不覚にも敵の土俵で勇み足)  
蒔いたこと忘れた土を驚かせ  
(蒔いたこと忘れた種が土を割る)

双虎 紀美代 絃 同 幸 同 利美 同 静枝

艶麗な花の母胎に土和み  
(花開く日を信じ切ってる土の貌)  
墓土となる身がやたら金を貯め  
発掘へ古代の文化甦り  
(土中から古代文化が目覚し)  
土煙あげる砂利トラにらみつけ  
なにもかも忘れて庭の土いじり  
(公休の一日無心に土という)  
土匂う古里臉にだけ残り  
土堀だけ残り旧家の消えた跡  
(時の波旧家の土堀へ遠慮せず)  
ほんものの土は打出の小槌とも  
万物を育てる神秘持つ土嬢  
(万物を育てる神秘を土に見る)  
土地成金他人のことと聞き流す  
境界のいざこざ土が笑ってる

同 江 水 同 鐘 堂 同 柳 五 郎 同 伊 津 志 同 昭 治

鈍行の窓に土の香媚てくれ  
山崩す土の悲鳴が聞えそう  
盆栽を育てて土も見てほしい  
(盆栽家土の苦勞を知りつくし)  
種蒔いて土の返事を待っている  
土色の肌を誇りに父生きる  
とよの土ベンベン草に見つけられ  
花時計土の香りをきき込んで  
塩からい土だと思ふ負け力士  
精農家土にいのちの火をもちやす  
土の精青磁となつて沈む艶  
題一触一八月二十日締切(十月号発表)  
宛先 倉敷市下津井一―九―三四 千七一一  
本田恵二郎

慶彦 功 同 文 子 静 泉 度 同 同 露 杖

石曾根民郎第三句集  
句柳 道 草 千円 価  
昭和四十年から四十七年までの作品を一九  
五ペーシに収めた美本。かつては麻生路郎門  
の逸足としてわれわれにもおなじみ深い作家  
である。  
昭和四十年七月七日 麻生路郎師逝く、と  
前書きして10句。  
独身の句妻の句孫の句見そなわせ  
叱られに来た大阪の日もむかし  
など胸を打つ句がキリヤを語っている。  
発行所 300 松本市大手三の五の十三  
(大名通り) しの川柳社

本庄快哉著  
句柳 蒼 宵 千二百円 送料共  
序文―近江砂人氏、柴田午朗氏。昭和十一  
年から昭和五十年までの作品が十年ごとにペ  
ーシをかえて発表されている。  
人生に矢印のないことばかり  
ほか共感の句がずらりならんでいる。  
完末付録の「ふるさと松江」には各氏の句  
が「覆光松江」となつて実に楽しい。  
本社同人の吉岡通児氏や恒松町紅氏らが句  
集完成に助力されている。  
発行人 600 松江市南田町四九  
本庄快哉

黄銅六角ボールトナット  
及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所 会社

大阪市天王寺区空堀町八番地  
TEL (06) 三四五二〇四  
夜間 (06) 四四〇八

大萬川柳

「指」

入選発表

選者 川村好郎  
 投句総数 六百五句  
 入選 七十五句

ぶきつちよな指で結構儲けてる

貝塚 つき子

遠足へ指折る子等の眼が楽し

大阪 頂留子

何よりの土産 果したVサイン

喜屋川 小路

指切りげんまんあしたへ夢を継ごうよ

鳥取 静泉

原稿へ才女の指はようしゃべり

八尾 弥生

指が躍動今日も北浜活気づけ

大阪 誓二

パントマイム指それぞれにものをいう

宝塚 静馬

うしろ指さされた過去を支えとも

藤井寺 美房

爪で灯をともした指が笑ってる

大阪 清松

節くれの指が恥じたり誇ったり

和歌山 武雄

マイホームのつもりか水虫指を出す

奈良 南天

うしろ指意識している日の孤独

その中に指をくわえた子が一人

笠岡 古庵

指一本触れずに死ぬほど惚れてい

倉敷 筒子

指きりの二人見守るおぼろ月

岡山 翁童

小指の誓い女はひとり温める

堺 千万子

傷ついて初めて指のありがたさ

山口 雀声

指先に心の揺れを見破られ

今治 琲珈俚

十指みなわが子のようにいとむ

八尾 夕花

欲ばれば指の股から洩れる砂

大阪 一栄

ペンだこの指を労わる定休日

大阪 美子

勲章をつけてやりたい妻の指

大阪 敏

童心の世界に指人形が棲む

鳥取 日満

節くれの指働けるありがたさ

東大阪 清人

合掌のその指先から陽が昇る

大阪 あいき

編棒をもつまっ白い指の妬心

岡山 一灯

職人の心の胼胝を指にみる

大阪 弘生

指先の器用倅せにつながらず

西宮 多久志

指切りの後の小指をそっと抱く

松原 サヨ

ペンだこもあって両立さす女房

大阪 柳信

ダイヤモンド飾った指は働かぬ

和歌山 与史

負け犬のひがみも混じるうしろ指

堺 一二三

虚栄心ひとり占めするくすり指

尼崎 利美

指太の父は苦勞を語らない

八尾 美幸

ペンダコの硬さ一家を支えてる

大阪 蘭

掃除婦の指にキラキラ光るもの

奈良 本蔭棒

過去捨てた女の指にないダイヤ

英詩

指先で触れる点字にあるロマン

鳥取 茶人

指をなげくくったか忘れてる

検問所重い気持で押す拇印

大阪 ますえ

驚嘆みしたそなた指をたしなめる

大阪 晴子

うしろ指よそに我が道行く自信

伊丹 漫柳

ペンだこの悲哀出世に遠くいる

堺 ひろ子

呱呱の声十指に握る明日の夢

堺 憲祐

しあわせと切り切る指で光らない

堺 憲祐

おふくろの指の先から冬になる

堺 憲祐

み

みんなの暮しが明るくなる  
セキスイのプラスチック



積水化学

本社 大阪市北区宗室町1

倅せな生立ちをもつ細い指

大阪 智子

自由の女神の指は宇宙の何を指す  
完敗の背に突きささるうしろ指

羽曳野 幽玄

ソロバンの指が重くなる家計  
親と子の温みが通う指相撲

松原 史好

演技めく指に女の過去が住む  
そむかれるかも私の指のエメラルド

藤井寺 花梢

指先に祈りをこめた千羽鶴  
待ちわびたレターへはずむ指の燃え

和歌山 寿子

節くれた指で宝石覗かない  
不器用な指で確かな暮し向き

西宮 百酒

宝石のない指しかと幸福む  
ご機嫌な指先ポナス数えてる

岡山 柳子

音のない世界に住んで指に生き  
影のある男小指を詰めた痕

箕面 一本杉

一億のひとりを探す指紋練る  
妻の指金もダイヤも知らず荒れ

鳥取 洋々

点字読む指愛おしむ日もありて  
パトロンが居ますとダイヤの指がい

神戸 どんたく

騒音の中で指話が明るい彩にする  
千羽鶴生きてる指の願いかも

今日逢える指リズムミカルタイピスト  
和歌山 太茂津

指切り八方美人の小指です  
富田林 美代

指くぐり抜けてもうなぎ桶の中  
堺 一舟

指一本触れぬ心にふれてみる  
八尾 夕花

盗る指も琴弾く指も同じ指  
橋本 恒治

どの指を切っても痛い親心  
大阪 ますえ

人ノ句  
引金に指触れさせぬ親子鳥

倉敷 白水

地ノ句  
開通のボタン汗せぬ指が押し

堺 一二三

天ノ句  
助けあい五本の指で箸つかう

高根 三和

選者吟  
また居留守だらうダイヤルの指離す

昭和五十一年度  
ベストテン(六月現在)

一 一三三 堺  
二 一三〇 八尾

三 花梢 二二五 富田林  
四 百酒 一一五 西宮

五 美幸 一〇、五八尾  
六 静馬 一〇、五宝塚

七 富子 九、五和歌山  
八 牧人 九、五神戸

九 天笑 九、五堺  
一〇 洋洋 九、〇鳥取

一一 多夫 九、〇和歌山  
一二 多久志 八、五西宮

一三 維久子 八、五富田林  
一四 美子 八、五東大阪

一五 好一 八、五大阪  
一六 小路 八、五寝屋川

一七 どんたく 八、〇神戸  
一八 幸 八、〇和歌山

一九 古庵 八、〇笠岡  
二〇 吸江 八、〇藤井寺

▼NHK川柳募集・選者 川村好郎

課題「先祖」  
用紙ハガキにて三句以内

締切 八月十日  
投句先 大阪市東区馬場町・NHK近畿本部「老後をたのしく」係

発表 八月二十八日(土) 午前九時十五分・NHK第一放送「老後をたのしく」の時間。

昭和五十一年度第九回「幽霊」五句以内  
締切 八月二十五日  
第十回「連想」五句以内  
締切 九月二十五日  
593 堺市堀上緑町一―三―七 藤井一二三方 大萬川柳係

華道関西未生流家元

籠島 総甫

教室 西宮市北口町七ノ九

教室 尼崎市武庫庄浅堀

教室 尼崎市武庫庄三丁目

教室 尼崎市武庫之荘三丁目

教室 武庫之荘文化会

電話(06)四三二―四一五〇  
電話(06)四三二―四一五〇  
電話(06)四三二―四一五〇  
電話(06)四三二―四一五〇

大森風来子氏と句碑



# 柳界展望

(原稿締切毎月末)

▼中島生々庵主幹令息一彦氏夫人の尊父が逝去され、七月二日が告別式だったがこの日は主幹の誕生日であり、ためにそのお祝いは一ヵ月後にされるお祝いは一夜の本社常任理事会には出席された。

▼川柳はこたて6月号で第18回花童子賞を発表。入賞

▼日川協51年度の常任理事は関東関西とも各10名ずつで、静岡・長野・新潟を含むむ以東が日川協東京事務所

▼同人の動向△本田恵二朗氏(倉敷市)は6月23日羽田からハワイへ。ライオンズ世界大会が

▼山内静水氏(竹原市)は9月5日の「たけはら創立20周年記念大会で」特別課題「自信」の選をされる(出席者のみ)△前号参照。なお故山田季贊氏の遺句集を企画中とか。友情国鉄を身をもって示めされる。

▼9号は随想と後記が読み物。の柱となっている。例によって洗練された編集ぶりが目を惹く。〒共五〇〇円。高槻市竹の内町22-1 河野方「風」発行所。

▼同人の動向△本田恵二朗氏(倉敷市)は6月23日羽田からハワイへ。ライオンズ世界大会が

▼山内静水氏(竹原市)は9月5日の「たけはら創立20周年記念大会で」特別課題「自信」の選をされる(出席者のみ)△前号参照。なお故山田季贊氏の遺句集を企画中とか。友情国鉄を身をもって示めされる。

▼吉田圭井堂氏(大阪府)から「最近はどうも健康がままならずどうも無沙汰しています。|本社句会用の句箋を愛媛がわざわざ車で届けてくださった。定評のある

第一席は「私ならこうする知恵を貸してやり」他四句。野沢素人

▼高橋操子さん(岸和田市)の句碑が岸和田市教委文化協会、または同市の柳文家が起ち上がり句碑建立に急拍車をかけ、場所は同市の風光明媚の久米田寺で、句は「ちっばけな善意でもよし心満つ」。句碑除幕式は51年11月23日。詳細は追って発表。

▼小林孤呂二氏(松江市)は七月一日付で松江市市役所の保健予防課長に榮進された。

▼吉田圭井堂氏(大阪府)から「最近はどうも健康がままならずどうも無沙汰しています。|本社句会用の句箋を愛媛がわざわざ車で届けてくださった。定評のある

# 花 公 榮 社

富田林市富田林町24-4  
TEL 07212 ③ 2 0 6 4

氏の柳話を早く拝聴したいもの。

▼岸南柳氏(大阪市)は再入院されたが、快方に向つていると、柳信さんからお便りをいただいた。

▼福田丁路氏(高槻市)金一封、編纂部へ。たびたびありがとうございます。

▼西尾菜氏(八尾市)会長の上十止庵氏の追悼特集。菊沢小松園氏会長の「南大阪」や竹中肖二氏会長の「東大阪」でも追悼記事を掲載故人の冥福を祈られた。

▼黒川紫香氏(尼崎市)は九月三日に愛媛夫妻とハワイ旅行をされる。

▼沢山福水氏は自宅改築のため(十月ごろ完成)当分和歌山市狐島六四一五へ▼故山田季賛氏(高槻市)を本誌へ正本水客氏が追悼文を書いておられるが、い

中島生々庵 共著  
中島小石  
句画集

生々庵

頒価 三千元 (送料二百円)

わゆる人気男だっただけに六月三日の告別式には三百名からの参列者があった。哀悼。(前号20日は2日と訂正)

▽旅信△  
▼板屋岳人氏(富田林市)が伊良湖から寄せ書書の旅信が問道を出ると灯台めつと立ち薫風。磯造り柳太

勝手に食えと突き出され花槽。寝覚めよし知多と瀧美に抱かれた夜一漫柳。

梅雨晴れ間灯台白くよみかえり一美代。一岬から灯台右手に見えるなり一岳人(6月13・14日)

▼宮口笛生氏(奈良市)から第20回岐阜大会全国鉄川柳人連盟の寄せ書拝受。(6月26・27日)

▼清水一保氏と森田布堂氏(鳥取県)は京都、近江方面へ二泊三日の旅を楽しまれた。日本の故郷古都の灯に抱かれ一保。

▽句会△  
▼篠山デカンショ祭吟行は八月十七日(火)午前九時三十分集合(梅田大阪駅中央改札前)詳細前号参照

▼南海川柳会は8月19日午後6時から南海電鉄本社食堂内で開催。題一自じろし無頓着・閉口。

▼南大阪川柳会は8月20日午後6時から松崎町三丁目大万で開催。題一迫力・急所・悩み・手芸。東大阪市下小阪七の十一竹中肖二宛。  
▼川柳東大阪は8月28日午後6時から東大阪市中央公民館二階・第二集會室で開

第五回 北陸小松川柳大会

日時 51年10月3日(日)午前10時午後5時  
場所 小松市小馬出町、小松市公会堂(国鉄小松駅から徒歩15分、市役所隣り)  
席題 各題共通①当日発表(大役)片岡湖風選(石川)奥美瓜露選②当日発表(石川)河崎幸太楼選(石川)酒井路也選③当日発表(富山)松岡緑朗選(石川)片岡健治選

宿題 各題単選  
①「悪女」 富山 田向 秀史選  
②「鏗」 大阪 橘高 薫風選  
③「出会い」 石川 森下 冬青選  
④「山」 大阪 住田英比古選  
⑤「精一杯の真顔」 新潟 藤井比呂夢選  
⑥「我慢」 本社 伊藤 茶仏選

出句 席題・宿題ともにそれぞれ二句提出  
締切 宿題11時30分・席題12時(投句拝辞)  
表彰 市長杯(席題賞)議長杯(宿題賞)本社杯(総合一位)他に二位賞・新人賞など

会費 五〇〇円  
連絡先 小松市本町一丁目一〇 吉田秀哉宛  
主催 こまつ川柳社



本職にあき裏口で金をため  
目に見えぬと本職の目にとまり  
本職の外はやれぬ自慢よし  
本職がいても知らず自慢する  
大丈夫かいなと本職気づかわれ  
棟梁にすねようがない五寸釘  
本職は息子にゆるぎの淋しい日  
大つばらに公表出来ぬ職で生き  
本職になれば無口がようしゃべり  
斜陽化の本職家紋へしがみつ  
猿まわしの猿本職の顔でない  
回り路して本職を継ぐと決め  
本職のひと味違うさびに触れ  
本職のさしずベッドでやかまし  
本職の目一本の杉がある  
政治屋になって年中駆け回り

兼題「路」

今日もまた人生航路は霧笛聞く  
定年に路傍の石となる友か  
十字路に善意きらめく白い杖  
背景の路面電車をなつかしむ  
路地裏に梅雨の晴れ間の金魚売り  
道路課はゴム長靴で応待し  
美しく老いた詩人の歩く路  
信濃路のみどりも賞めて旅かえる  
北風も路地の温みを知っている  
清貧に甘んじ路地裏に住み慣れる  
幾度目の迷路で夫婦手を握る  
野心家の進路に吊橋ゆれている  
望郷の水路は霧の湧くところ  
さまざまの愛の路線に地図がない  
運命が狂う十字路とも見えず  
路地裏に住み一輪の花でよし  
地藏さんの路で女は弱くなる  
人生の航路へ父の羅針盤

潮花 作二 小三 水客 牧幸 牧羊 警二 君子 一三 醉々 一松 千子 日満 弘生 緑之助 千子 柳志 武雄 一三 千夫 重人 庸佑 文秋 重人 祥月

悲しみの花輪が路地をせまくする  
果てしない海にも船の通る路  
生と死の迷路で神の力借り  
欲すて活路へ霧がパッと晴れ  
むかしを今に都大路を牛車曳く  
丸唱随路はしずかに黄昏る  
丸出しの人情に泣く路地に住み  
路地深く住んで大志を失なわず  
やさしさに飢えて路傍の花となる  
海当し善意路傍に今日も咲き  
本道の遍路傍に今出すバスと  
人生の航路へ舵を妻しかと  
肝冷す路肩はみ出すバスの幅  
路地裏にまだ人生が生きていた  
い曲りまだ他人の迷路ゆく  
君までが他人の顔になった岐路  
年度末路は半分出来ただけ  
鈍行はたのし線路が曲つて  
単純な迷路で迷っている焦り  
何かしら不安な予感で回り路  
騙される愛だつてある並木路  
過疎に行く赤字路線の錆びたまま  
路地に住むおんなへ遺産くると噂  
道路まで座席にした前売券  
袋小路皆んな幸せだと思ひ  
アスファルト過ぎると旅路らしくなり  
暗号で黒い路線が敷いてあり  
水道が埋めれば道路ガスが掘り  
よみがえる心の旅路に目を閉じる  
十字路で女迷つた振りをする  
路地裏の待つ俵せな靴の音  
路面から一玉は世をなげき  
十字路にない幸福の道しるべ  
街路樹のはてに別れがまつている

夕美 潮秋 文久 維久 大輪 醉丸 鶴升 漫柳 鎮彦 柳宏 明き 鬼遊 勝晴 道夫 恒敏 君明 智子 柳宏 独舟 一功 葛城 夕花 鬼遊 無聖 祥月 いわ 一郎

人生航路明日を占う灯へ頼り  
再起する心へ路標立て直す  
真実一路私にかけのない暮し  
この路線亡父も歩いた五十年  
兼題「峰」 好郎氏代選 正本  
湧く霧が峰を尊いものにする  
幾つもの峰越えて来た顔の皴  
古戦場昔を偲ぶ峰の松  
眼線より高い男の峰歩く  
峰打ちのような左遷で社に残り  
峰に來てまだ登りた空があり  
強いタッチあれば此処から推いた峰  
雲の峰今日は恩師と逢えそうな  
峰一つ越えて仏の声を聞く  
剣ヶ峰男を上げるかも知れず  
あの峰に思い出があり霧けむる  
靈峰を苦もなくこえてゆくゼット  
山男の四季は峰から降りてくる  
此の峰を越せと人間試される  
峰々の対話を運ぶ朝の雲  
峰怒る日の人間は小さ過ぎ  
愛称で峰の一つは親しみま  
峰々一つの悲しみに包み込み  
峰一つ一つが違う色で立つ  
雲の峰男の闘志かき立てる  
雪解けの峰から出稼きの父帰る  
峰に立つ足は裾野を忘れない  
握手して別れて雲の峰残る  
走馬灯峰を歩いていた夫婦  
五合目で峰を仰いでいる私  
三日月が涼かされてから忘れず  
大声で叫べば峰が近くなる  
遺言を書かない男に雲の峰がある

作大 鬼喜 重重 醉太 智督 紫凡 与呂 千凡 君い 幸恒 醉夕 花日 弘日 日正 弘千 水客 多花 溪滋 久久 志志 水雀

峰に立つ男は白紙にかえつて  
 征服の峰を見降ろす峰がある  
 峰歩く男一人の夢描く  
 金歩く手ぶらで登るこわい奴  
 峰へ来てまた次の峰見えてくる  
 峰打ちに似た父の布石が今更に  
 兼題一 大空  
 大空の心でいたい病み上り  
 大空へ三日干された梅の皺  
 籠の鳥夢で大空つつ走る  
 大空に読むほど増える星の数  
 飛行機を降りて大空はと見る  
 大空を舞台に火花散るさだめ  
 大空に小さい欲を笑われる  
 大空を眺めているのに策が出ず  
 大空へ二十の春を叫びたし  
 青春のページになかった空の色  
 大空に祝メーデーのアドバルン  
 大空へ痛む心は覗かせぬ  
 大空の機嫌は雲と雨で知り  
 大空に語る夢あり草に寝る  
 大空へ幼い命は疑わす  
 大空に心吸われて草に寝る  
 大空へ散りさわゆる花と人  
 大空の下で善人欺されず  
 大空へ乞食と犬が欠伸する  
 大空へ貧しき者は旗を立てる  
 大空は広いと風のひとりの言  
 大空の掟には無いきのこと雲  
 青空にする公約も入れて立ち  
 大空に描いた夢は夕焼ける  
 日の丸の良き大空が美しい  
 渡り鳥空の大きき気がしけず  
 大空の下にひろげる地獄図絵  
 頼るものなし大空を仰ぎみる

小松園選

鎮十郎彦  
 漫柳代  
 古方客  
 水客

柳栄  
 登美也  
 藤持  
 芳朗  
 あいき  
 喜一  
 操明子  
 恒升  
 醉生  
 幸生  
 綾生  
 武生  
 君子  
 幸子  
 つき子  
 め遊女  
 鬼遊  
 重文  
 文秋  
 一二人  
 柳宏子  
 双功  
 夕花  
 功花

大空へ向いて男の嘘をつき  
 身を守る小鳥はさつと大空へ  
 大空の中で小さい日本を見  
 死刑の眼に大空が澄んでいる  
 大空はまたかまたかとおびるが伸び  
 四面楚歌大空だけの味方にて  
 大陸のほんとおびるが大空や  
 大空へ子らの夢無限のびていて  
 大空へ線引ききたる赤い国  
 風船の眼界大空知っている  
 補聴器をはずして大空へ手をひろげ  
 草に寝て大空母の顔もなごみ  
 大空の星と語ればぬれぬ  
 大空へ吐く暴言で耐えている  
 空広く容るす心になつて  
 大空の青き片付かぬ赤い旗  
 大空を仰ぐゆとりもなく稼ぎ  
 大空の星へ理屈はとどかない  
 大空の果てに墓碑をたてておく  
 大空と語るに仮面などいらぬ  
 大空は男の涙を知つており  
 大空のどこかで母の声を聞く  
 大空の知らぬ小鳥に墓がある  
 大空の自由は籠の外にある  
 ポスターのように大空暗れていず  
 大空へ雁は乱れること知らず  
 大空の下で日中天に女逃げ  
 羽衣を渡すや中天に女逃げ  
 兼題一 巨星  
 巨星なり巨星の心知っている  
 巨星消えその他大勢も消え  
 巨星には夢の夢だよ小役人  
 黒棒の巨星のことば信じよう  
 ここまでは秘書にまかしている巨星

潮朗花  
 明香  
 紫秋  
 潮花  
 文方  
 千文  
 古舟  
 一舟  
 庸舟  
 通舟  
 夕花  
 武助  
 君満  
 日遊  
 誓遊  
 百遊  
 静馬  
 敏馬  
 操子  
 大喜  
 重輪  
 大輪  
 小松園  
 栞選  
 千寿子  
 どんたく  
 弘久朗  
 重人

ライバルの数もさすがという巨星  
 インタビュー巨星を意識した笑い  
 貧しさを生涯愛す巨星伝  
 哀れ巨星半身不随という最後  
 巨星近く報へざわめくカブト町  
 これからは孤独巨星の座に置かれ  
 着流しでどうんすすつている巨星  
 巨星墮つあとは静かな天の川  
 悪名を死ぬまで抱いていた巨星  
 死ぬまで誰も巨星と言わなんだ  
 算術もちやんと心得ていた巨星  
 老母といふ時だけ巨星息が抜け  
 勲章が巨星の墮ちてから届き  
 マスコミが騒ぐから巨星かも知れず  
 釣合をとつて輝く北斗星  
 父親に返る巨星の背が丸い  
 叙親返上巨星自適の如露の水  
 カストリ手を飲んだ時代もある巨星  
 点滴にもただ一つある泣きどころ  
 巨星西へ流れてからの白い距離  
 巨星とも言うれ怪物ともいわれ  
 新聞の巨星火の刑水の刑  
 巨星の光芒受けて心の遺産とす  
 巨星今日暗いニュースの人となる  
 柳壇の巨星を恩師に持つ誇り  
 政界に巨星落ちてより久し  
 放言をすればニュースとなる巨星  
 巨星墜ちてその言行が神話めく  
 巨星にも射られる馬が嫌い  
 凡俗に生きて巨星の字が嫌い  
 一枚の額に巨星を閉じこめる  
 大御所として赤富士を描き続け  
 巨星の日記空白のページがない  
 (河井庸佑・整理)

日満  
 芳子  
 美志  
 多志  
 武助  
 緑之助  
 静馬  
 小松園  
 勝晴  
 勝松園  
 文秋  
 鎮之助  
 一三彦  
 きつみ  
 いわみ  
 つき子  
 恒明  
 岳人  
 肖二  
 美幸  
 君子  
 君幸  
 花子  
 水升  
 酔客  
 牧人  
 牧人  
 重人  
 無聖  
 鬼遊  
 水客  
 弥生

# 老地物壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

## 川柳ささやま

河原みのある報

久し振蒲団を干して帰り待つ 千代子  
一升びんでんと握えたり久し振り 越山子  
式服の夫婦で出るも久し振り 久子  
久し振り肩をならべてみたい月 とよ子  
人間のほかは素直な太陽の子 可住  
子に托す夢に遺伝は冷たすぎ 素水  
頬かむり親爺そっくり遺伝かも 百合子  
女系三代型を破った鯉のぼり 近江  
口ぐせは半分歩きながら云い みのる  
口ぐせの貧乏人が金残し 江  
口ぐせが飛び出しそうな笑む遺影 喜美代  
口ぐせが話題にきわす七回忌 よしの  
まじないも効かぬ長尻もて余し 宗珠  
葉の花句会 内海幸生報

信じると生命線が長くある 岳人  
薔薇全開見事に死ぬるときがある 作二郎  
お日さまの香りタオルに母がいる 紀美代  
認識票もないのか鳥の骨拾い 喜正  
東京の便り信じる野の仏 鬼遊  
麦笛を吹くと男の旅になる 酔々

一本のタオル流れる梅雨の川  
投票をして来て誰も信じない  
日雇のタオルに匂う汗の跡  
青麦の過ちを許しそうになる  
花言葉信じてきれいに別れねば  
女王蜂滅びの曲は信じない  
信頼の輪を一人抜け二人抜け  
麦秋は実る女神の髪に似る  
哀しい時も道化はとんぼ返えりする  
潔白を信じてくれる母在わす  
押し麦の記憶あの頃あつた国旗です  
労働の汗でタオルは色を増し  
花を買う時の男は素直だな  
信じられてると信じて朝の靴  
京都・塔の会 松川杜の報

## 京都・塔の会

松川杜の報

営業のよろめきだけでマダム老け  
花見えるところへ押された車椅子  
また鏡を見てる恋らしい  
舞台から鼻質の顔が見おろせる  
花吹雪一時帰休の子と浴びる  
息子のネクタイ妻の好みの柄になり  
夜汽車待つ梅雨の砂針また遅れ  
味の素使わぬことで妻自慢  
きき酒の味はためしですぐ吐かれ  
殿さまの好みの味がまだ残り  
おふくろの味にかなわぬ店ばかり  
信濃紀行生そばの味から書き始め  
転勤のたびに妻の友ふえている  
叱られて膝でへのへの書いている  
子持ち鮎青葉の味が溶けている  
川柳後楽(岡山県) 井上柳五郎報

童心にかえり竹馬乗っている  
我欲をかなぐり捨てて童心となる  
童心の抜けぬ同士が手を握り  
童心にすまぬと知った家庭不和  
洋食に老父は箸も注文し  
左手で箸持つ吾子に托す夢  
割箸が途中で折れた日の不運  
立喰いのうどんの箸は口で割り  
すき焼の鍋でお箸の小競合い  
箸袋に旅の思い出出し込む  
食欲がないのに箸を割ってくれ  
お見舞の子供がねだる千羽鶴  
親善に異国へ旅立つ千羽鶴  
麻痺の子が折る千羽鶴飛び立たず  
もう泣かぬ顔を涙をさそつてる  
こみ上げる涙こらえてドラマ見る  
優勝の感激涙拭かずおき  
左遷地へ妻も黙って目に涙  
春うらら老桜負けず花をつけ  
川柳しんぐう吟社 川上大輪報

ひろし 恒洋 定平 秋月 柳五郎 勝 佐加恵 昌郎 吾 久米雄 元一 胡風 照路 楽遊 雷山 廉 紫峰 大輪 深水 深き子 十郎 富子 雀踊子 とよ子 福水 輝寿 幸 としよ

限界のコマ中心を見失い  
岩の意志波の誘いへゆるがない  
許す氣の母は無言の岩田帯  
龜に似た岩で長寿を祈られる  
運動会吾子だけ見える球おくり  
岩石をダイヤに見たい日の落ち目  
岩通す信念心に決めただけ  
ふちかます波をかえして岩不動  
ようこそと迎えサビスそれつきり  
御近所の目へ見てほしいつき置く

オーエスケー川柳会

大坂形水報

ダイヤルの手がためらっている安否  
間違ったダイヤル先に噛みつか  
ダイヤルを孫に取り取られて寝てしま  
メモ帖の電話番号気にかかり  
税務署メモ書き数字重く視る  
メモ見れば今日は泊りの予定表  
家計簿に妻愚痴らしいメモがあり  
ぼくは鉄で貴女の爪を切りまじよう  
素顔だと男のようなおっ母さん  
通勤者素顔揃えて無表情  
面影がわずか残っていた素顔  
素顔には停年の皺も走ってる  
厚化粧落せば母の顔がある  
だいこんを切るにも家計考える  
お見舞いの切花重い山道  
気に入らぬ朝の素顔の化粧室  
人間の素顔を見たり特売場

いずも川柳会

板垣草丘報

苗木撰るみんなの好きなもの  
子らみんな枕はずして伸び盛り

金松 武雄 弘生 明史 功寅 栄成 常夢 岳麓 健坊 聖地 一夢 千扇 博泉 亜也子 形生 入仙 好郎 虎秋 独仙

赤とんぼ日暮れに近い雲を追う  
匂わせた言葉の端が読み取れず  
苗植える絆がピンと若い嫁  
逆境に近い他人のアドバイス  
又来てねバーの出口でキッスされ  
法律も裏の出口を少し開け  
アスファルトみみずの出口封じ込み  
苗植えてのんびり雨の音を聞く  
出口まで出て一言の妻の癖  
籠抜けと知らず出口で待ちぼうけ  
重宝な質屋があまり近か過ぎた  
定年の出口いよいよ近くなり  
せつかくの苗運霜に泣かされる  
縄のれん出口で会うて後戻り  
焼いかが午餉が待てないワンカップ  
赤だすき苗代眼も過去のこと  
苗穴の数ほど妻から苗屋まで

川柳塔まつえ

岡崎祥月報

紫陽花の楚々たるもあり華やかに  
別居して姑の顔が近くなり  
再職の給料袋かるすぎる  
再職のできる健康体うれし  
紫陽花に昼の雨降る愛の家  
もし妻が子かと思つてする点訳  
別居など止しなと風鈴が鳴っている  
太陽は嫌い紫陽花そっぽ向き  
再就職背広はもとのままの柄  
父さんと別居子供は進学期  
再職の決意だまつて髪を刈る  
紫陽花は七色花が嘘ついた

川柳わかやま

津田与史報

幸福をつかんだ娘と見送る娘  
家族の意見一応組んだマイホーム  
逃亡者が明日を狙う地図がある  
父ちゃん留守のんびりとのはず足  
プロポーズ狙い外れた夜の街  
身に覚えあつて意見も強く出ず  
素直な意見へ感謝する勇氣  
意見もうされななくなった不倅せ  
ドッジボール服のきれいな子を狙う  
友情の意見再起へ虹が立ち  
瞬間を狙うレンズの無表情  
カス掴んだと女房に惚れている  
狙ってるうちが倅せかも知れず  
誰からも意見出させてほめ上手  
疵理屈の意見本音が覗いてる  
意見など聞く耳持たぬ反抗期  
雑踏の中のにんびり身を委す  
いつの日か汗が何かを掴むだろ  
酔つて来た父のポケット狙われる  
もう掴む杭ない流れの中にいる

川柳たけはら

森井番居報

島の春素足で海を歩こうか  
親の夢娘の夢今日はデイトです  
中華料理勿体なくも下げられる  
何が狂つて今日は失敗ばかりする  
青空を写す瞳に嘘がない  
嘘や嘘やと独身にしてくれず  
幸福が純白を着て歩いてる  
水廻りの底で女の繭を抱き  
ひとりごと聞いてくれそな春の風  
桜散る子の喚声とおむすびと

英子 寿子 雀踊子 天彦 まさ枝 光代 千寿子 道夫 福水 幸キ 好郎 嘉之 喜登司 和子 武雄 十郎 与史 焼水 鬼房 千代美 文晴 蘭幸 白狐 不朽 笑子

春をさかになに酒呑みのスケジュール  
あるコンプレックス後輩の背が高い  
マイカーによいそう少しまどをあけ  
急がずたゆまず柱時計のマイペース  
ここだけの話に風がはたとやみ  
早出残業それでも職のある強み  
ケチケチためて不況へもってかれ  
爽やかな眼に爽やかな雲一つ  
つつき合うドテ鍋ロマンスがすばらしい  
頂上は遙かかと知った日の焦り  
大空を押し上げ我が家の鯉のぼり

和歌山七面句会 中筋三幸報

手加減をしたばっかりの敗北者 武雄  
屋に逢う友とは古いお付あい 宏也  
裸婦の線パンで溜されて肥りけり 富子  
いい加減な話まともに聞く律儀 幸子  
頰杖の屋の空虚へ思慕つもの 隆恵  
屋の夢微なロマン咲いて散り 光治  
共稼ぎ妻の云い分通すパン 勇次  
手加減が出来ぬ男の生れつき 政三  
甘口から口嫁が中もつ味加減 凡夫  
ロッキード手加減してる高官名 夕夫  
草に寝る屋の五体は雲に乗る 其夕  
屋根替の父へ屋餉の刻を告ぐ 多加子  
ええ加減休めと無理な天の声 多加子  
フランスパン抱え不意なジョッピング 多加子  
味加減姑におそわるコツのこり 幸子  
駅前でパッター逢うた屋下り 幸子  
川柳 大阪 児島与呂志報

愛のあるベッドの花を絶やさぬ 道子  
振りかえる起伏はいまは懐つかしく 小松園

庄助にあやかり朝風呂たいて見る  
アルバムは悲しいときも見るものか  
八つ当り通天閣から飛んだるか  
アルバムへ明日の歴史は消してある  
写つてないところにアルバム秘密もつ  
春近しネクタイ替え出かけよう  
母さんのスタミナ残りものばけよう  
角切らの鹿奈良の野を八つ当り  
イソップの寓話が胸の奥にある  
父もかく生きしか白梅寒に耐え  
止り木で耐えてマダムをなびかせる  
アルバムに廻り舞台が貼つてある  
魚屋の鉢巻き冷凍魚が躍る  
景気などかわり知らぬ子とベツト  
落島の父はアルバム見たがらず  
列島のほかに逃げ場の無い庶民  
精力を水増ししてる老いの意地

南大阪川柳会 金井文秋報

登りつめた峠で過去の地図を焼く 牧人  
とぼとぼと峠を失意同士降り 小松園  
故郷をすてる峠の深い霧 雀踊子  
この里の喜怒哀楽を知る峠 恒明  
峠茶屋しぶ茶に変わるココロ あいき  
追われてる悪夢鉛の靴をはき 綾女  
盗聴のテープで揺れる椅子もあり 誓二  
お喋りの口へはりたいガムテープ 儀一  
云うたが何ならテープ掛けたるか 君子  
テープが切れて女の情熱白くなる 君雀  
肩書の順に知人の名を並べ 文雀  
保険勧誘やがて知人も尽きてくる 文雀  
金魚すくい隣りの人も顔なじみ 酔々

敏 天樹 眉水 雀踊子 弘生 重人 つき子 洛醉 醉々 醉人 肖二 美幸 凡九郎 静女 酔馬 醉升 与呂志 金井文秋報

困る時知人だんだん遠くなり  
迷惑を掛けず知人の距離で居る  
偽りの心に鬼が棲んで居る  
偽りの涙は人に見られたし  
紅い灯が消える偽りの町消える  
金婚の笑顔電話親にさせ  
偽りの欠勤電話親にさせ

川柳東大阪 竹中肖二報

たばこの輪男は愛に飢えている 美幸  
愛し合う二人に言葉など要らぬ 柳宏子  
愛すればこそ言葉が読みとれず 儀一  
すぐ愛を口にし自分を軽くする 凡九郎  
うなずいて見せた無口の父の愛 右近  
その愛に答えてバラの素直なり 維久子  
親の愛信じきまつてる子の寝顔 弘生  
武士の愛は死に方まで教え 鎮彦

佳句地10選 (前月号から) 谷垣史好選

能面の裏に烈しき血の通う 夕花  
叱る時父が寂しい顔になる 雀踊子  
波しぶき強きものには強く打つ よしほ  
善人の視野まっ直ぐな道ばかり 肖二  
挫折した日から本当の夫婦なり 小松園  
忘れたいとしをきっちり祝われる 南柳  
いい靴下は息子が先にはいてゆく 度  
まねき猫耳は入口ばかり見る 三光  
早熟で風の匂いを知っている 醉々  
今日迄は他人が乗った霊柩車 十郎



定退のあとの連休味気なし  
もう一度頭を冷やしてこいと言う  
明日も働ける一杯のコップ酒  
また熟へ抜ける夜の寝付かれず  
五月晴れ沈む心を励まされ  
琴の音にふと足留めて菊を追う  
罪深い心に憩いの灯を点す  
雲流れ連休へ蟻歩き出す  
一と休み一と休みして風の坂  
連休の電車若さをすし詰めに  
虹川柳倶楽部(唐津市) 新潟回天子報  
寝不足を補う嫁の里帰り五木  
外電が高官へ又至近弾照沖  
保守は駄目でも革新に任せれず  
養生訓金婚式に披露をし

清川 正祐  
紅半歩  
婦美子  
千世子  
総甫  
伊女  
伊升  
牧人  
いづみ  
五木  
照沖  
広坊  
キヤンプの灯寝不足のまま朝となり  
新婚の遅刻笑顔で叱られる  
子や孫に囲まれ金婚の日本晴  
高官も高山のごと霧かかり  
高砂やから金婚へけわしすぎ  
金婚に名前も知らぬ孫もいて  
身ぶるいいや唄もうめない父の酒  
寝不足を若さで凌ぐ牌の音久隆  
金婚で切ったテープの渡り初め  
パパ抜きは孫も出来そう仲間入り  
寝不足の訳は云いにくい二人  
餌による鳩知らぬまに土産置いてゆき  
三井が丘川柳会 高田 博泉報  
夜学から帰る明日の靴磨く度  
なわ張りのゴミ箱を持ち地下に寝る  
亡き友も録音で参加同窓会 三郎

### 雅号ぶっちゃげばなし(151)

みのる



河原みのる

かわら

本欄に登場する資格はなく、不真面目のそしりを免れません。最初にままよと付けた本名即ち平かな号がそのうち改号をと思いつつも二十有余年瞬く間に過ぎてしまいました。只今では川雑、塔社で同称のお方がないのがせめてもの幸です。平かな号の得失はいろいろあります。由緒ある雅号でそれと名の通るには及びもないが、今では殆どかなでまに合っています。一ろくでないか決めて漢字の封を切る一會うみてとよりだつたせいなき一余生いくばく、もう改号も追っ付きません。一もう一度だけ本名の届け要り

明治34年3月25日生・農業

雅号といふも一つの人格から自己をみつめる川柳の本質から言え

カセットに明朗父は生きつづけ  
亡き父のテープもどして又もどし  
録音がすり切れそうな英会話  
初声をテープに入れて取っておく  
行楽地ゴミ箱横目に食い散らし  
参観日ゴミ箱見ると息を吐く  
給料前うし箱此処で息を吐く  
大学の要門金の成る木生え  
校門を出てから真に火を点ける  
録音に衿までただしてのぞんでる  
録音へ会議は遅々と進まない  
ゴミ箱へ捨てた古靴泣きじやくる  
どんぐり川柳会 谷垣 史好報  
あきらめた時からしこり解けはじめ  
傷心の女へ四季はタツチせず  
禅寺の寒い緑を見ています  
俄雨素知らぬ足の石仏  
レタスは緑えんどう緑夫婦の膳  
さりげない言葉にしこりからませる  
ふだん靴の子供を待っているみどり  
俄雨靴のえがすがとが取れかかり  
一と言がいがえず尾灯にあるしこり  
求愛をソフトタッチでそられる  
たかぶりの素足芝生を強く踏み  
緑葉にバラの花ピラひっかかり  
バトンタッチそれから業績上りだし  
子の命沈めて池のみどり色  
子タッチすて盲目の手に血が通い  
俄雨貸すて気兼ねな女傘  
バトンタッチしてからの酒旨くなり  
電話口しこり残したまま切れる

三千子  
加代子  
小路  
亜也子  
てまり  
公子  
琴音  
一菁  
亜成  
博泉  
柳宏子  
亜鈍  
史好報  
弥生  
薰風  
好郎  
千歩  
修史  
醉々  
小松園  
鬼遊  
美幸  
真砂  
重夫  
万里  
喜雄  
高風  
儀一  
吸江  
ヨ

・ 募 集 ・

十月号発表 (8月15日締切)

川柳塔 (10句) 若本多久志 選  
 水煙抄 (10句) 川村好郎 選  
 愛染帖 (3句) 正本水客 選  
 課題吟 (各題5句以内)

「新刊」 松本忠三 選  
 「選手」 西岡洛醉 選  
 「暴力追放」 恒松町紅 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。  
 ★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

十一月号発表 (9月15日締切)

川柳塔 (10句) 若本多久志 選  
 水煙抄 (10句) 川村好郎 選  
 愛染帖 (3句) 正本水客 選  
 課題吟 (各題5句以内)

「大都市」 桑原喜風 選  
 「米」 横山一声 選  
 「秋晴れ」 西森花村 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かながいにしてください。

一人の遅稿 大ぜい困る

定価 三百五十円 (送料29円)

半年分 二千二百五十円 (送料共)

昭和五十一年七月二十五日印刷  
 昭和五十一年八月一日発行

大阪市南区饗谷中之町二〇番地  
 編集兼 福集 中島 蓬太郎  
 印刷所 藤原 童心社

郵便番号 542

大阪市南区饗谷中之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一三九八五番  
 振替口座大阪・三三三六八番

本社八月句会

日時 八月六日(金)午後六時  
 会場 金属会館

南区饗谷東之町10番地  
 電話 271・3935番

柳話 西尾 梨 (今月の出題・河内天笑)

兼題 「鈍感」 香川醉々 選  
 「ものさし」 若柳潮花 選  
 「日参」 川村好郎 選

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守  
 会費 三百円

★投句だけは切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
 大阪市南区饗谷中之町20

川柳塔社

9月の兼題 「森結ぶ」 「かほちゃバス(車)」

たのしさひろがる お買物



阪急

大阪梅田本店  
 千原阪急  
 神戸三宮支店  
 東京大井町店  
 京都河原町店  
 京極支店  
 口スアンゼルス阪急

・ペンペン草・

暑中お見舞い申します  
★はじめの頃は、冷夏とやらで気分爽快だったが、七月にはいつてからは毎年と同じように暑い。ちよつと外出するとシャツを水に浸したようになる。そんな時、冷房のきいた喫茶店へでもはいると、水のシャツを着ているようになるのでかえって気持ちがいい。夏はやつぱりに手がた。暑中広告のご協力ありがとうございます



うまさそのままお届けします  
**アサヒビール**

ございました。

七月の常任理事会

★議題は前月と同じように来年度の路廊誌と本誌の六百号記念に仕上げられた。格人への普及版発行は可能に違いが、今ひとつの企画はまだ発表の段階にきていない。出席者は多久志・薫風・牛久庵・安・静馬・柳志・いむを・白酒・教人・小松園・一三夫（敬称略）

高橋操子さんの句碑

★本社の女流作家の最古参である岸和田市の高橋操子

▼葉子コーナー

▼暑中で汗下花に実が成り、実が成るのは珍しく不吉な年のように新聞に載っていました。

▼ご近所の家で軒下に縁が果を二つも作って、こんなことは、ここ数年ないことだと言っておられました。このお話を老人にしますとそれじゃ今年には大きな台風が来ますよと言われまして。

▼実吉やササキ台風の無い年でありませうに小さな台風で大きなお祈りをしておりませう。

暑中お見舞い申しあげます

51年 盛夏

関西奇術教室  
校長 村田 颯 太

さんの句碑が建つという朗報で、このおし暑きをふっ飛ばしてほしい。句は「ちっほけな萬意でもよし心満つ」  
★句碑除幕式は昭和51年7月23日（勤労感謝の日）で

ある。健全地は久米町寺で参詣人も多く絶景の地と聞かされた。  
★操子さんはご承知のように、世話好きで親分肌なので、周囲の人々が動き出したようである。岸和田市教育委員会や市文化協会の後援などで急速に句碑建立が具体化したのではないかと

おもう。

★操子さんは非常に謙虚な方で、社に關することなどいつもぼくのような者に相談してくださる。そのくせはくは岸和田の大会にいつも案内状をいただきながらだ。一回も出席していない。だんじり祭りなどでご招待をうけても仕事のため、まかす専門なのに、ついぞイヤ味だらしいことも聞いたことがない。愚妻がぼくを責めるほど、髪ままだにさせてもらっていて、心のなかでは出しわけなく思っているが、ここ十数年間、その責を果たしていないのだ。

★操子さんの樹歴は古い。昭和七年からで、岸和田句協会の創立が二十四年三月といふから、樹史に残る女丈夫でもある。樹史に、商業に失敗され、笠置の山坂を越えてきたのも用柳といふ。光明があつたればこそと述べられる。その人の視分肌はこうしたところ、成生活を経験した。善、がさうさせたのであらうか。  
★操子さんから、こんどだけは強を出して、と、約

**アリナミンA**  
お役だていただくために タケダ

肉体的疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミン補給、神経痛・筋肉痛・腰痛・肩こりの緩和  
会日1日1〜4錠を1〜3回に分けて服用してください。合服用量をよく読んでおしるお休いでください。☆25年記念の星かぶりの賞  
☆取寄先は薬科株式会社 〒114 東京都中央区新富町2-1-1

★目を守るため、あまり木を減らなくなった。校止きを減らせばよいのだが、校止用のためどうも感傷勝ちになる。秋田實先生から日本語と英語をいいたくない。落人さんが思わぬを出して笑ってしまふという。何かイライラするものを感じることも目である。一三夫

